



令和8年7月29日

三重大学
三翠同窓会発行☎ 059-231-9677
振替 00850-6-8198

ご挨拶

三翠同窓会長
前川 行幸

本学100年の歴史の約半分をこの大学で過ごさせていただきました。ありがたいことです。

三翠同窓会報第18号発行にあたり一言ご挨拶申し上げます。三重大学三翠同窓会の皆様には、ますますご健勝にお過ごしのことと心よりお慶び申し上げます。平素より本会の活動につきましては多くのご協力をいただき厚く御礼申し上げます。また会員の皆様は、国内はもとより広く海外にまでその活躍の場を広げられていることは誠に喜ばしい限りであります。

三重大学大学院生物資源学研究所の歴史は100年を超えております。ひとえに100年と申ししても大正10年(1921)三重大等農林学校設置にその端を発し、以来多くの卒業生を輩出し、その人数たるや2万数千名に達しております。私は昭和47年(1972)三重県立大学水産学部卒業です。この年に三重大立大学は国立移管され、さらに昭和62年1987年に農学部と水産学部が統合され全国初の学部統合により生物資源学部に改組されました。本学に65歳まで教員として、その後5年間の産学連携コーディネータを経て、指折り数えますと学生時代を入れると約50年の大学にお世話になりました。

本学の歴史を物語る建物として三翠会館が本学正門近くにあります。この建物は昭和11年1936年に同窓生の献金により建築されたもので有形文化財に登録されています。内部には三翠同窓会の本部事務局があり、生物資源学研究所の歴史を物語る資料が数多く展示されております。本会館は平成14年(2002)に大幅な改修工事が行われ現在に至っておりますが、最近さらに老朽化が進んでおり、また付属の三翠庭園の整備も含め文科省から改修のための補助金が付きました。不足分については、学内役員会からの要請があり、理事会の了承を得て三翠同窓会から補助させていただきました。キャンパス南門近くにも一つ一つの有形文化財、旧帝国ホテルの建設に携わったアントニン・レーモンドが設計したレーモンドホール(旧三重大立大学付属図書館)もあり、ぜひ一度お立ち寄りください。

さて、同窓会というのは大学の社会における最大の応援団であります。同窓会は卒業生の親睦だけでなく母校並びに卒業生の発展を図り支援することが大きな目的であります。今後とも同窓会としては、母校と連携しながら卒業生のみならず在学生も含めて母校の発展に寄与していきたいと考えております。そのためにも同窓会の方々、本学教職員および関係機関の皆様方の同窓

会へのご理解とご支援を切にお願いいたします。今後の本学の益々の発展を祈念いたしまして同窓生代表の私からの挨拶とさせていただきます。

ご挨拶

生物資源学研究所長・
学部長
橋本 篤

三翠同窓会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素より、生物資源学研究所および生物資源学部にも多大なるご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。また、この度の三翠会館の改修にあたりましては、多大なるご寄付とご高配を賜りました。前川行幸三翠同窓会長をはじめ、勝崎裕隆学内代表理事、ならびに構成同窓会の各位に厚く御礼申し上げます。

さて、1921年(大正10年)の三重大等農林学校の設置から100周年を記念し、100年ぶりの新種であるクマノザクラを植樹いたしました。今春はその木がたくさんの花を咲かせました。三翠同窓会の皆様とともに、生物資源学研究所・生物資源学部が新たな2世紀目を歩み始めていることを力強く感じた次第です。現在、8年計画が進められております校舎の改修工事が本格化しており、本研究所および学部は次なる飛躍に向けた転換期を迎えております。

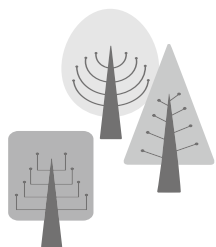
私事ではございますが、令和7年4月に生物資源学研究所長・学部長を拝命し、本年度で2年目を迎えております。現在は、

塚田森生副研究所長(教育担当)、松田陽介副研究所長(研究担当)、木村哲哉評議員、名田和義附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター長に加え、研究科長補佐として松田浩一教授(研究担当)、倉島彰教授(広報担当)、森尾吉成教授(教育・学生担当)、中島千晴教授(国際交流)を配置しております。さらに、全学的な視点からのご意見を伺うべく、柿沼誠副理事(研究企画戦略・地域連携担当)を加えた執行部体制にて研究科の運営にあたっております。事務部門につきましても、就任3年目を迎えた谷仁事務長のもと、一丸となつて研究科および学部の管理運営に取り組んでおります。

現在、三重大学をはじめとする国立大学法人は、1期6年の中期目標・中期計画に基づいて運営されております。昨年度は第4期の4年目にあたり、本年度は第4期における最も重要な中間的暫定評価を受ける年となります。この評価結果は、次期(第5期)の運営費交付金の配分に反映されるため、そのもととなる極めて重要な報告書を提出する年度と位置付けられています。

また、続く第5期は、2040年に向けた「18歳人口の激減」への対応と道筋を定めるべき時期となります。昨今、私立大学の定員割れや女子大学の共学化などが報じられておりますが、国立の地方大学におきましても、人口減少の影響は顕在化しつつあります。そこで私たちは、各部署が持つ特徴や歴史をしっかりと踏まえつつ、大学院の重点化や国際化を視野に入れ、第5期を「新たな三重大大学のかたちを見据えた基盤作りの期間」と位置づけて取り組みを進めてまいります。

紀伊半島と伊勢湾を包括する紀伊黒潮生命地域は、日本最大の半島を基盤とした多様な自然環境と豊かな生態系を有していま



す。このような特徴を有する地域に設置された本研究科・学部は、農林水産・食品・気象分野を網羅する「総合農学」の部局として、気候変動や社会情勢の変化に伴う食料安全保障などの諸課題に対し、「世界が直面する課題は、すでに三重にある」という視点を持ち、今後も地域の中核的教育研究機関として機能し、発展し続けてまいります。

さらに、前述のとおり、これからの教育研究においては、一層の国際化と地域社会との共創が不可欠です。近年は海外からも多くの交流の機会をいただいております。様々な側面で地域の皆様からお力添えをいただいております。こうした変革の時だからこそ、三翠同窓会の皆様からの深いご理解と温かいご支援が、これまで以上に重要となつてまいります。

末筆ではございますが、三翠同窓会の会員の皆様におかれましては、同窓会活動をますます活発に展開していただき、本研究科および学部のさらなる発展とともに支えていただきますようお願い申し上げます。皆様のご健勝とご多幸を心より祈念いたします。私からのご挨拶とさせていただきます。

会 告

三重大学三翠同窓会会員各位

三重大学三翠同窓会会長 前 川 行 幸

三重大学三翠同窓会総会を下記のとおり開催しますのでご出席をお願いします。

記

- | | |
|-------------------|---|
| 日 時
会 場
議 題 | <p>令和 8 年 9 月 12 日 (土) 午後 3 時から (三翠同窓会三重県支部会総会終了後)</p> <p>三重大学生物資源学部 大講義室 (2 階)</p> <p>1. 令和 6・7 年度事業報告及び会計報告について</p> <p>2. 役員改選について</p> <p>3. 令和 8・9 年度事業計画及び予算案について</p> <p>4. その他</p> |
|-------------------|---|

令和 8 年 7 月 29 日

専攻等近況報告

資源循環学専攻

専攻長 名 田 和 義

同窓会会員の皆さまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。資源循環学専攻ならびに資源循環学学科の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り、心より厚く御礼申し上げます。本専攻・学科の近況についてご報告申し上げます。

大学院生と教員が所属する現在の 3 講座体制 (農業生物学・森林資源環境学・国際・地域資源学講座) は平成 27 年 (2015 年) に始まりました。学部の組織としては資源循環学学科として、それぞれの講座が教育コースという形で独立し、教育と研究を行ってきました。一方、令和 6 年度からは生物資源学部は 1 学科 (生物資源学) 体制に移行し、令和 8 年度において資源循環学専攻・学科という体制は学部 4 年次以上の学生と大学院生となりました。したがって令和 8 年度が資源循環学学科の最終年度ということになります。新体制では、農林環境科学コースとして、資源循環学専攻と共生環境学専攻の多くの教員により構成され、農学、森林学、農業土木・環境情報システム工学が融合するコースとなりました。大学の教育と知の鍛錬の場が研究室であることを考えると、それぞれの研究室の専門性を維持したまま、連携による研究力と教育力の強化をはかるものと理解しています。

令和 1 年度の冬に始まったコロナ禍も現在では落ち着き、通常通り対面での講義、

学生実験、農場実習・演習林実習を実施する日常を取り戻しております。一方、コロナ禍で余儀なくされたオンライン講義や会議のスキルが教職員、学生に浸透し、むしろ有効なツールとして活用されています。

また、近年、大学教育の現場では生成 AI の導入が急速に進んでいます。その活用は多岐にわたり、学生にとつては個々の学習進度に応じた「個別最適化された学習」を支援するパーソナル・アシスタントとしての役割を担っています。一方で教員側にとつても、教材作成の効率化など、教育の質を向上させる有力なツールとなっています。三重大学では AI 利用に関して、「禁止」ではなく「適切な活用」を前提としたガイドラインを策定しており、AI を批判的に使いこなすリテラシー教育を含めた、新しい教育モデルの構築が求められています。

資源循環学学科の就職率は、就職希望者のうち 98% 前後と高いレベルで安定して推移しており、令和 6 年度では 100% を記録しました。就職業種の内訳は、公務員が 28% を占め、続いて製造業、卸・小売業、57% が東海圏へ就職します。進学は学部卒業生のうち 39% で、大学院生の就職傾向も学部と同様となります。このように資源循環学専攻・学科は地域共創に主体的に、そして積極的に寄与する有為な人材を輩出しております。様々な場面で卒業生の皆様にお会いする機会があるかと思えます。ご縁がありましたら、皆様から後輩へのご指導や励ましを賜りますよう、よろしく申し上げます。

専攻内の人事異動では、令和 7 年 3 月をもって緑環境計画学の松村直人教授、資源作物学の梅崎輝尚教授が定年によりご退職になりました。また、令和 8 年 3 月をもつ

て、分子遺伝育種学の掛田克行教授が退職されております。また、令和8年3月には森林総合環境学の洲上佑樹准教授が異動のため退職されました。一方、令和7年4月に園芸植物機能学の村上寛准教授、昆虫生態学の鈴木紀之准教授、森林利用学の渡部優助教、附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター演習生の鶴田健二准教授が着任されております。また、令和7年10月に循環経営社会学の藤本麻里子助教が着任されております。

研究科内の運営面では、塚田森生教授、松田陽介教授が副研究科長を務めておられ、中島千晴教授が研究科長補佐(国際交流)に就かれており、日々、ご尽力をいただいております。現在(2026・4・1)の専攻の教員構成を記します。

■農業生物学講座

○分子遺伝育種学

諏訪部圭太教授

○資源作物学

(地域イノベーション学研究科)

長屋祐一准教授

○園芸植物機能学

名田和義教授(専攻長)、

村上寛准教授

○動物生産学

松井宏樹教授、伴智美准教授

○草地・飼料生産学

近藤誠准教授

○植物医科学

中島千晴教授、白水貴准教授

○昆虫生態学

塚田森生教授、鈴木紀之准教授

■森林資源環境学講座

○森林保全生態学

木佐貫博光教授、鳥丸猛准教授

○森林微生物学

松田陽介教授、北上雄大助教

○土壌圏生物機能学

水野隆文准教授

○緑環境計画学

松尾奈緒子准教授

○森林利用学

板谷明美教授、渡部優助教

○木質資源工学

中井毅尚教授、内迫貴幸助教

○木質分子素材制御学

野中寛教授(副専攻長)、

徳永有希助教

■国際・地域資源学講座

○循環経営社会学

野中章久教授

○国際・地域資源学講座

(地域イノベーション学研究科)、

○資源経済システム学

常清秀教授

○国際資源植物学

関谷信人教授

○国際資源利用学

吉原佑准教授

○附属教育研究施設

(紀伊・黒潮地域フィールドサイエンスセンター)

○附属施設農場

奥田均教授、長菅輝義教授

○三島隆准教授

三島隆准教授

○(兼)木佐貫博光教授、

沼本晋也准教授、鶴田健二准教授

○協力教員

先端科学研究支援センター

○協力教員

大山 暁男教授、土屋亨准教授、

加賀谷安章准教授

○連携大学院

○木質資源工学

(国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所木材加工・特性研究領域)

黒田克史教授、鳥羽景介准教授

○自然共生学

(国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所関西支所)

神崎菜摘教授、渡壁卓磨准教授

続きまして、本専攻講座および学科コースの近況について講座主任から紹介いたします。

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、日頃より本学ならびに農業生物学講座の教育・研究活動に対しまして、格別のご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

■農業生物学講座

講座主任 長 菅 輝 義

現在、農業生物学講座は、7つの教育・研究分野と2つの教育研究施設から構成され、15名の教員が在籍しています。近年の体制変遷として、令和7年3月に梅崎輝尚教授がご退職され、令和8年3月には掛田克行教授が早期退職されました。一方で、令和7年4月には村上寛准教授および鈴木紀之准教授が新たに着任し、講座全体として新しい研究テーマや若い力が加わる体制となっております。

農業は、人類にとって不可欠な「食料生産」を担う基盤産業であり、安全でおいしい食料の安定供給、環境保全、生物資源の持続的利用といった重要な役割を果たして

います。本講座では、こうした農業の営みを生命科学の視点から支えるため、作物・動物・微生物など多様な生物を対象に、分子レベルから個体・生態系レベルに至るまで幅広い教育・研究を展開しています。

本学農学部教育理念にも掲げられているように、学生には農学の専門知識に加え、生物学の基礎理論を体系的に修得し、生命現象への深い理解を通じて、食料問題の解決や豊かな環境を維持するための知識と技術を習得させています。生命のしくみ、生物と環境との関係、生物多様性を学問と実習の両面から学ぶことが、本講座の大きな特徴です。

以下に、農業生物学講座を構成する各教育・研究ユニットの概要をご紹介します。

○分子遺伝育種学

(諏訪部圭太教授)

植物育種において重要な生殖機構(受粉・受精、自家不和合性、花器官形成など)を対象に、遺伝子・ゲノムレベルでの解析を行っています。ゲノム編集技術や遺伝子導入技術を活用し、育種に有用な遺伝子機能の解明や新品種創出に貢献する研究を進めており、基礎研究と応用研究の両立を目指しています。

○資源作物学

(長屋祐一准教授)

食料・飼料・工業原料として利用される資源作物を対象に、その生育特性の解明や栽培・利用技術の開発を行っています。三重県特産のイセイモ、ダイズ、水稲などの新品種育成や環境保全型農業技術の確立を通じて、地域農業への貢献を重視した研究を展開してい

ます。

○園芸植物機能学

(名田和義教授、村上寛准教授)

果樹や野菜を中心に、園芸植物が持つ生理機能や環境応答に着目し、高品質・高付加価値生産につながる栽培・管理技術の開発を行っています。高糖度・高機能性野菜の生産技術や、温暖化に対応した果樹栽培技術など、実用性の高い研究課題に取り組んでいます。

○動物生産学

(松井宏教授、伴智美准教授)

ウシやブタなどの家畜を対象に、「消化管微生物」や「ホルモン・脂質代謝」に注目した基礎研究を行っています。動物の生産性向上と環境負荷低減を両立させる家畜生産体系の構築を目指し、持続可能な畜産の実現に貢献しています。

○草地・飼料生産学

(近藤誠准教授)

乳牛・肉牛の生産を支える飼料資源の生産と効率的利用をテーマに、飼料の栄養価評価や消化性の解明を進めています。動物実験や微生物培養、成分分析を組み合わせ、家畜の健康と生産性、さらには国内飼料自給率向上に寄与する研究を行っています。

○植物医科学

(中島千晴教授、白水貴准教授)

植物病害や病原菌(特に糸状菌)を対象とし、野外調査、顕微鏡観察、分子生物学的解析を融合した研究を展開しています。植物病の診断・同定技術の確立や、難防除病害への対応を通じて、環境負荷の少ない病害防除技術の基盤構築を目指しています。

○昆虫生態学研究室

(塚田森生教授、鈴木紀之准教授)

作物の花粉媒介に関与するハナバチ・ハナアブ類や、農業害虫・侵入昆虫であるカメモシ類などを中心に、昆虫の行動・進化・生態を研究しています。生物多様性の保全や生態系サービスの持続的利用を見据え、基礎から応用まで幅広い研究と教育を行っています。

○附帯施設農場

(長管輝義教授、奥田均教授)

日本の食生活に欠かせないダイズは、国内自給率が低く、その安定生産が課題となっています。本農場では、梅雨期播種に伴う茎葉の過剰成長や光合成効率の低下に注目し、ダイズの成長特性と温度・土壌水分条件との関係を解析しています。さらに、子実生産と土壌の物理化学性との関連にも着目し、持続可能なダイズ栽培体系の確立を目指しています。また果樹分野では、水管理を鍵とした栽培技術により、果実品質と付加価値の向上に取り組んでいます。

○植物機能ゲノミクス部門

(土屋亨准教授、加賀合安章准教授)

高等植物の生命現象をゲノムワイドに解析し、遺伝子レベルで植物機能を解明するとともに、分子育種への応用を目指しています。世界に先駆けて開発されたエピジェネティクスを利用した育種法など、先端的手法を駆使し、病害や環境ストレスに強い作物の創出に取り組んでいます。

このように、農業生物学講座は、生態レベルから分子レベルまでを網羅する非常に幅広い研究領域を有し、農業と生命科学の

融合によって社会課題の解決に挑み続けています。

結びに、三翠同窓会会員の皆様のますますのご発展とご健勝を心より祈念いたしますとともに、今後とも本講座への変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

▼自己紹介・鈴木紀之先生……………

2025年4月に准教授として昆虫生態学研究室に着任しました鈴木紀之です。三重大大学には昆虫学の長い伝統があります。その一員になれたことを誇りに思います。

現在の研究テーマは、昆虫の多様性が進化したメカニズムとその波及効果について明らかにすることです。具体的には、(1) テントウムシのニッチ分割(すみわけ)による共存のしくみ、(2) イモムシの複雑な色彩パターンと捕食回避効果、(3) 表現型多型がマクロな動態に与える影響、について取り組んでいます。

アウトリーチ活動にも興味をもっています。子供たちを対象にした昆虫観察会や環境教育イベントを随時開催しています。協力してもらっている学生にとっては、自分たちの研究がいかに社会につながっているのか認識できる機会になっています。

また、本の執筆を通じて昆虫や生態学の魅力をわかりやすく伝えることを目指しています。拙著『すごい進化』『ダーウィン』(ともに中公新書)をお読みいただければ幸いです。

▼自己紹介・村上 寛先生……………

このたび、農業生物学講座 園芸植物機能学研究室に准教授として二〇二五年四月に着任しました村上寛と申します。前任の

平塚伸先生が二〇一九年に退職された後の果樹園芸分野の専任教員として、果樹に関する教育・研究を引き継いでおります。

出身は愛知県名古屋市中で、三重大大学に赴任する前は静岡県庁に二二年間勤務しておりました。県庁時代は、主に果樹研究センターでは、果樹の栽培技術、品種育成、収穫後管理、さらには加工利用に関する研究に携わり、「生産から消費まで、果物の魅力をどう高めるか」をテーマに取り組んできました。また、行政面では、一貫して果樹振興に関する施策の立案・推進まで幅広く、果樹産業に関わってきました。研究・行政の双方に携わってきた経験を活かし、学生とともに汗をかき、次世代へつながら果樹産業の発展に貢献したいと考えております。

果樹生産の現状を見ると、産地を支える生産者の八〇%以上が六〇歳を超えているといわれ、高齢化が大きな課題となっています。このため、果樹産業の未来を担う若い世代の育成は急務であるとともに、責任ある仕事となっています。私は、果樹づくりの面白さや、地域の基幹産業として加工まで広がる果樹園芸の魅力を伝え、若い方々が将来、果樹産業に携わるという選択肢を身近に感じてもらえるよう、取り組んでいきたいと考えています。

赴任してまだ日が浅いものの、学生から「果樹についてより専門的に学べるようになって嬉しい」との声を聞く機会もあり、果樹教育・研究に携わることへの大きなやりがいを感じております。伝統ある本学の果樹園芸分野において、これまで諸先輩方が築き上げてこられた教育・研究の蓄積を継承しつつ、時代の変化や地域のニーズにも対応しながら、より一層本分野が発展で

きるよう努力してまいります。今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願いいたします。

■森林資源環境学講座

講座主任 板谷明美

三重大学生物資源学部では、令和6年度に改組が行われました。現在の3年生からは「森林科学専修」、4年生以上は「森林資源環境学教育コース」に所属し、研究に励んでいます（詳細は学部ホームページ <https://www.bio.mie-u.ac.jp/junkan/forest/> をご覧ください）。学部生は2年次進級時に農学・森林科学・農業工学のいずれかから専修を選択し、3年次進級時に研究室に配属されて本格的な研究をスタートします。1学年は30数名ですが、近年は大学院（博士前期・後期課程）への進学率が高まっているほか、インドネシア、中国、ソロモン諸島などからの留学生も増加しています。これにより、本学の基本理念である「地域を見つめ 三重から世界へ 世界から三重へ未来を拓く地域共創大学」が森林科学分野においても着実に具現化されつつあります。

教員の動向につきましては、令和7年（2025年）3月に緑環境計画学教育・研究分野の松村直人教授が定年退職され、令和8年（2026年）3月末には森林総合環境学の瀧上佑樹准教授が他大学へ転出されました。一方で、2025年4月1日付で附帯施設演習林に鶴田健二准教授が、森林利用学教育・研究分野に渡部優助教が着任されました。現在は、森林総合研究所との連携大学院2分野を合わせた計9つの教育・研究分野で学生の指導にあたっています。

ます。各教員の研究内容は、大学ホームページのほか、三重県林業技術普及協会の機関誌「三重の林業」の連載でも紹介されておりますので、ぜひご覧ください。

私が三重大学に赴任して、今年10月でちょうど20年が経ちます。この間、多くの先生方の退職を見送り、新たな出会いを迎えました。今後も伝統を守りつつ、新しく赴任された先生方や若い先生方の力強いエネルギーと柔軟な発想を取り入れながら、時代の変化に応じた森林科学の教育・研究を行い、社会に貢献できる人材を育成してまいれる所存です。同窓会の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

▼自己紹介・渡部 優先生……………

2025年4月1日より資源循環学専攻、森林資源環境学講座、森林利用学研究室に助教として着任いたしました、渡部優と申します。出身は神奈川県逗子市です。信州大学にて学士・修士の学位を取得後、林業系コンサルタントおよび特任研究員として2年間の社会人経験を経て、岩手大学にて博士の学位を取得いたしました。三重大学の出身ではございませんが、この度、三重県にて大学教員として教育・研究に携わる機会を頂けたことに、大変不思議な縁を感じております。

学部生以来、私は「林業」を対象に研究を行って参りましたが、その原点は大学入学前に、三重の著名な林家の方の著作に触れ、実際にその手により作り上げられた美しい森を訪れた体験にあります。その原体験が、人と森をつなげ、社会の経済循環と自然の物質代謝を接続する「林業」という

営みに魅了されるきっかけとなりました。以来十余年の歳月を経て、学位取得と公募の時期が重なり、再びこの「始まりの地」に戻れたことに深い感謝を抱くとともに、初志貫徹の想いを新たにしています。

私の現在の研究テーマは、生産条件に応じた丸太生産設備の「最小効率規模」の解明です。戦後林政の施策群は、一貫して「規模の経済」を追求するための拡大を志向してきました。しかし、経済理論における規模の経済の要点は、「長期平均費用を最小化する生産規模（最小効率規模）」は、生産環境や市場、技術によって変動する」という点にあります。つまり、持続可能な木材生産を可能とするには、一律の規模拡大を推進するのではなく、地域条件に応じた最適な生産規模の模索と、それを支援する体制の構築が不可欠です。これまで取り組んできた路網整備の意思決定支援に加え、現在は解析対象を施業団地や林業機械へと拡大し、三重県の特性に合わせた素材生産量・設備の最小効率規模の解明を進めております。

今後は、地域の森林管理主体および林業現場に積極的に足を運ぶ中で、学生とともに学術・現場・行政という三つの視点から森林資源管理を展望し、ともに経験と知識を深めていきたいと思っています。そこで得られた知見を広く社会へ還元できるよう、真摯に教育・研究に励む所存です。若輩者ではございますが、同窓生の皆様、ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

■国際・地域資源学講座

講座主任 関谷信人

国際・地域資源学講座では、2025年10月に藤本麻里子助教（循環経営社会学）を迎え、自然科学系2分野と社会科学系2分野の体制を復活させましたが、残念ながら2026年度末にはグローバル資源利用学利用学コースが消滅します。

各分野は、引き続き大学院の国際・地域資源学講座に所属しますが、学部では以下のように別々のコース・専修に所属することになります。

【大学院：国際・地域資源学講座、学部：農林環境科学コース農学専修】

国際資源植物学（関谷信人 教授）
国際資源利用学（吉原佑 准教授）
循環経営社会学（藤本麻里子 助教）

【大学院：国際・地域資源学講座、学部：海洋生物資源学コース海洋生物資源学専修】

資源経済システム学（常清秀 教授）

小規模であることに加えて、大学院と学部で捻じれた構造にはなりましたが、周辺講座の協力を仰ぎながら、教育の質を担保するために精進しております。同窓会の皆様には、当講座の教育・研究体制についてご理解いただき、今後ともより一層のご支援、ご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

▼自己紹介・藤本麻里子先生……………

2025年10月1日より国際・地域資源学講座、循環経営社会学研究室に助教とし

て着任致しました、藤本麻里子と申します。出身は滋賀県彦根市です。地元に近い三重大学で仕事ができることを嬉しく思っています。前職は鹿児島大学水産学部の水産経済学分野助教で、農学部と水産学部が共同運営している、国際的な食糧問題について学ぶ国際食料資源学特別コースの教育を主に担当していました。前職で国際コースを担当していたのは、私の研究がアフリカ地域研究という研究分野で、東アフリカのタンザニア連合共和国に20年以上通ってフィールドワークに基づく研究を実施しているためです。

タンザニアはアフリカ大陸最大の湖であるビクトリア湖、アフリカ第2位の面積を持つタンガニイカ湖、アフリカ第3位の湖マラウイ湖(タンザニアではニヤサ湖と呼ばれる)の沿岸国であり、内水面漁業が盛んです。また、インド洋にも面しており海面漁業も盛んです。タンザニアにおける漁業・水産業と水産加工業、水産物流通などの研究を行ってきました。日本で重要な漁業資源として利用されているカタクチイワシですが、タンザニアのインド洋沿岸でも種は違いますが、カタクチイワシ科の小魚が漁獲され、煮干しに加工されています。それら生産された煮干しは、内陸国に大規模に輸出されており、生産過程で発生する魚粉は鶏飼料としてタンザニア国内で利用されています。アフリカの第一次産業において、生産者が適正な利益を得ながら持続的に資源を利用していくために必要な政策や制度について、現場の声をもとに考えています。

アフリカと日本、場所も経済状況も全く異なりますが、第一次産業が抱える問題には共通点もたくさんあります。流通業者に

比べて弱い立場にある生産者、天候不順や資源の変動など自然条件に翻弄される生産現場、資源の過剰利用問題などです。これらの問題を考える上では、日本とアフリカいずれの事情も互いに参考になります。今後は三重県の農林水産業の現場にもお邪魔し、アフリカの現場に活かせる知恵はないか、あるいはアフリカの知恵が役立てられる地域はないかを考えながら、三重県各地の地域課題に取り組んで参りたいと考えています。

共生環境学専攻

専攻長 渡辺 晋生

共生環境学専攻の最近の動向についてご紹介いたします。現在、本専攻には21名の選任教員がおり、これに2名の兼務教員を加えて教育・研究にあたっています。学部学生の教育・研究体制は、地球環境学教育コース、環境情報システム学教育コース、農業土木学教育コースの3つの教育コースからなり、博士前期課程では、地球環境学講座、環境情報システム工学講座、農業土木学講座の3講座、博士後期課程では、気象・地球システム学講座、環境・生産科学講座の2講座で教育・研究を行っています。この2年間でご退職された先生方、新たに赴任された先生方、各研究分野の詳しい様子につきましましては、各講座の紹介をご参照ください。

生成AIの急速な発展により、本学科・専攻の学生たちの学びの環境や講義の進め方にも変化が見られるようになりました。従前の机では天板が狭く、PCを広げると教科書やノートを置かない学生の姿も珍し

くありません。配付資料やスクリーン投影を用いず、画面表示のみで進む講義やオンデマンド講義も増えています。レポート作成や英語文献の整理、プログラミングの場面では学生のPC画面に生成AIが常駐しています。AIに使われるのではなくAIを使いこなし、効率的により確かな知識と技術を身につけるためにも、教員と学生、また学生同士のコミュニケーションの重要性をあらためて感じています。

近年の売り手市場の影響もあり、学部生、大学院生ともに就職状況は好調です。進路は従来からの公務員や技術職を中心に、省庁、地方自治体、機械産業、情報産業など多岐にわたっています。給与面の魅力から民間志向の学生が増える一方で、公務員志向の学生も依然として根強く、いずれの分野においても採用人数が増加しているため、需要に供給が追いついていない状況です。一方で、大学院進学率も維持しながら元氣と意欲を備えた人材を社会に送り出し続けています。

令和6年度の改組から3年が経ち、本年度は共生環境学科に在籍する学部生は4年生のみとなりました。来年度からは、各教育コースのカリキュラムはすべて新教育組織に移行しますが、大学院の専攻・講座はまだしばらく継続されます。引き続き地域と協同して社会に貢献できる人材、また最新の機器や技術を用いてスマート農業や脱炭素の推進に対応できる人材の育成に努めてまいります。同窓会の皆様には日頃より多大なご支援、ご指導を賜り、心から感謝申し上げます。今後ともより一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

地球環境学講座

講座主任 立花 義裕

地球環境学講座を卒業、修了された同窓会のみならず、お元氣でしょうか？私は、自身が卒業した大学の同窓会には入っていません。同期に卒業した友人の話によると、同窓会名簿には、「立花義裕…所在不詳」とだけ書かれているらしいです。私は過去の履歴にすぎような生き方が好きではないので、同窓会には入らなかったのです。いまや、私の卒業した大学には、私の卒業した学科名は現存していませんし、その講座が復活したらしいとの噂も耳にしましたが、さだかではありません。一旦消えたので、名称は同じであっても、きつと中身は違っていることでしょう。時代は移り変わるのですから、中身が変わるのは当然です。会社だって、合併や分社、そして乗り取りがあるのは日常茶飯事です。政党も、分裂、合併、新しい政党の立ち上げ、そして、政党名の変更などがちよくちよくです。政党名が変わるタイミングで別の政党に乗り換える政治家もたくさんいますね。各政党に同窓会があるのかどうかは知りませんが、その場合、各政治家や、政治家OBやOGは、どの政党の同窓会に出るのでしょうか。そう考えると、同窓会を各講座で分けることがどういう意味があるのか？という根本問題にぶち当たります。例えば京都大学は「国際卓越研究大学」の認定に向けた大規模な改革として、創立以来の伝統であった「講座制」を廃止の予定と聞きます。京都大学のことでですから、コースだの、専修だの、部門だのと名前を変えて、ゾンビのように実質的な講座維持を目論んではい

ないでしょう。このように、日本の大学では、講座は消えゆく運命と思いますが、歴史のとして振り返り、記録に残す価値はありとおもいます。

私が三重大学に赴任してから、私が所属した講座は、3つあります。博士後期課程の講座を含めると、さらに2つ増えますので、合計5つの講座となります。忘れがちですが、博士後期課程から三重大学の大学院生になった学生もいらっしやいます。政党が合従連衡するように、講座も合従連衡、分裂、など大きく変わっていますので、皆さん各々が卒業修了された年によって、名称が違ってきます。ですので、本来は、生物資源学研究科に過去に存在した全ての講座名を列挙して、それがいつ出来て、いつ消滅したのかを書かねばならないはずですが、社会科の教科書によくある、明治時代以降の政党の遍歴図のようなモノが必要なのです。その全容を知っている人はほとんどいないと思います。ですが、少なくとも私が赴任して以来の私が所属した講座の遍歴は、おぼろげながら覚えていきます。ですが、それもいずれ忘れていくことでしょう。私はそれでいいと思っています。私は過去を振り返る生き方はあまり好きでは無いからです。

では、私の知る限りの当講座の歴史を振り返ってみます。地球環境学講座の生き字引でもあり、記憶力が鮮明な葛葉泰久教授が、2026年3月で定年退職されましたので、15年以上在籍の古株は私のみとなつてしまいました。以下に遍歴を記しますが、記憶違いがあったらごめんなさい。

私が三重大学に赴任した当初は、自然環境学講座という講座がありました。私はそこに所属していました。そこには、松尾奈

緒子先生や、昨年定年退職された松村直人先生も講座構成員でした。その時代は、講座内は極めて楽しい雰囲気があったと記憶しています。この時代は、学部組織と大学院組織が全く同一でありました。いわゆる学部と大学院が煙突形の組織となつていて、分かりやすい時代でした。但し、博士後期課程の組織は、異なっておりまして。

後期課程は、実質的に機能していなかったもので、名称も失念しています。ごめんなさい。その後、今から約10年前の2015年頃に改組があり、講座名が変わり、地球システム学講座となりました。講座名が変わったと書きましたが、それは正しい表現ではありません。改組なので、スクラップアンドビルドが行なわれ、「自然環境学講座」が消滅し、新たに「地球システム学講座」が誕生したのです。旧「自然環境学講座」構成員は全員、新「地球システム学講座」に「入講」し、他に、亀岡孝治先生と渡邊晋生先生も加わって、新「地球システム学講座」が誕生いたしました。2名の先生が、自然環境学講座に加わったのではなく、新講座が誕生したのです。古いモノが消えて、新しいモノが出来たのです。多勢側が新組織の主導権を握る構造は軋轢を生みがちで、よくないです。それは企業の合併でも同じですね。この改組では、学部組織と大学院組織が、異なっていました。煙突形が崩れたことになりました。学部はコース制となりましたが、ここでは省略します。

この改組で、生物資源の3専攻全てで、スクラップアンドビルドが行なわれた、と私は認識していたのですが、そう思っていない先生方が多数だった気がします。

なお、このタイミングで、万田敦昌先生と、西井和晃先生が、他大学から移籍され、

この講座構成員となりました。このとき、博士後期課程の講座の名称変更も実施されました。そのときにできた博士後期課程の講座名が、「気象・地球システム学講座」です。講座名を変えようとしたり、新たな名称の講座を立ち上げようとする、たいがいは、その名称をどうするかで、採めま

す。ですが、「気象・地球システム学講座」は、全く採めずに、立ち上がりました。この講座は、今でも生きています。ただし、修士課程の講座構成員と博士後期課程の講座構成員は、違っていました。例えば、加治隆光先生や、春山成子先生もこの講座に所属していました。このあたりから、私の記憶は曖昧になってきます。その後、地球システム学講座教員に数名の入れ替わりがありました。学部課程のコースと修士課程のねじれが解消するタイミング前後だった気がします。そのときに、講座に加わったのが、取出伸夫先生と飯島慈裕先生でした。この時期が、私が所属した講座歴の中で、最も人数が多かった時期でした。共生環境学専攻の中で教員数が一番多い講座でした。このタイミングで、講座構成員内の意見として、講座名を変えようというところになり、「地球環境学講座」が生まれ

ました。その数年後、数名の先生が、他講座や他専攻に移籍されました。一方、山田二久次先生が他専攻から、当講座にいられた。そして、その後は、定年で引退された先生や、他大学に移籍された先生がおられて、徐々に講座の先生の人数が減っていき、今は人数がほぼ半減しています。一方2024年の12月に、小川史明先生が新任として赴任し、現在に至っています。約15年の地球環境学講座の歴史上で初めての、外部からの新任の先生です。小川先生は気

象・気候ダイナミクス研究室の助教です。

以上が、私(立花)が直接経験した講座史です。歴史学は単なる過去の出来事の記録ではなく、一次史料を基点とし、論理的な検証によって「なぜその出来事が起きたのか」「なぜ社会がそのように動いたのか」を解き明かす科学です。注意すべきは、その史料が「いつ、誰によって、どのような目的で作られたか」を吟味し、偽造やバイアスがないかを確認しなければ、なりません。権力者は自己が肯定されるように、歴史書をつくる傾向があります。

今後の「地球環境学講座」がどうなっていくのかは、私にはわかりません。私は間もなく定年です。こうなつて欲しいという希望はありますが、それは言わないことにしています。退職後、私の手元に同窓会誌が届くことがあれば、そのとき、知ることになるのでしょうか。ああ、やっぱり、気になる自分がここにありますね。同窓会反対論者だったのに、なんたることか。では、皆さん、健康に氣をつけて、元気で楽しく、未来指向で生きてください。

どこかで学生時代の先生方を見かけたら、遠慮なく、一声おかけください。ね。教員は学生たちを覚えていてくれるのです。

▼自己紹介・小川史明先生……………

2024年12月1日より、共生環境学科・気象気候ダイナミクス研究室に着任いたしました。小川史明と申します。専門は気象学・気候力学で、とくに大気と海洋の相互作用、低気圧の発達、偏西風の形成・変動といった大気のダイナミクスに関心を持って研究を進めております。地球規模の気候変動を対象とする立場から、博士課程在学中より国際共同研究に取り組んでおり、2014

年から2020年までノルウェーに研究員として在任して以来、現在に至るまでその活動を継続しています。

私たちが日々感じる天気は、風や雨を含め、気体や液体の運動としての流体力学によつて説明されるべきものです。その背後では、大気と海洋の自然変動に加え、人為起源の温室効果気体の排出などが地球規模で複雑に絡み合っています。こうした複雑な系の中で、私が特に関心を持っているのが、海面に存在する「前線」の役割です。これは暖かい水と冷たい水が接する境界であり、黒潮や親潮の合流域などに見られます。このような海洋前線帯は、大気に水蒸気や熱を供給する重要な場であり、その上空では低気圧が発達しやすくなるなど、天気に大きな影響を及ぼします。私は数値シミュレーションや理論的考察を組み合わせることで、観測される気象現象や気候平均状態の形成過程、その変動メカニズムを、地表から成層圏に至るまでの広いスケールで明らかにすることを目指しています。

近年は世界的に猛暑が頻発し、従来は専門家の間で主に議論されてきた地球温暖化の深刻さが、一般社会にも広く認識されつつあると感じています。自然を対象とし、その将来予測にも資する気象学は、農業・漁業・エネルギーといった社会基盤と密接に関わっています。こうした社会とのつながりを意識しながら、研究と教育の両面で貢献していきたいと考えています。

教育においては、学生自身が主体的に考え、試行錯誤を通じて理解を深めていくことを重視しています。物理や数学、統計学、さらにはプログラミングといった幅広い素養を、研究のための単なる知識としてではなく、「気象学に限らず物事を説明するた

めの道具」として実感してもらい、将来社会に出た後も活かせる力として身につけてもらえるよう指導していきたいと考えています。

まだ着任したばかりではありませんが、本学の教育・研究の発展に貢献できるよう努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

環境情報システム工学講座

講座主任 福島 崇志

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、日頃より当講座の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り、また、卒業生を温かく迎えていただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

近年は人件費の高騰等の影響により、大学の財政状況が一層厳しさを増しており、当講座におきましても新たな人材確保が容易ではない状況が続いております。そのような中、王秀崙教授におかれましては令和8年3月末をもってご退職され、当講座にとつて大きな節目を迎えることとなりました。長年にわたり教育・研究にご尽力いただきましたことに、改めて心より御礼申し上げます。

現在、本講座は王先生ご退職後、教員6名の体制のもと、長い歴史の中で培われてきた農業機械学の教育の灯を絶やすことのないよう、教員それぞれが専門性を持ち寄り、工夫を重ねながらカリキュラムの維持に努めております。農業機械学科充足時には教員が12名在籍していたと伺っておりますが、そうした時代から受け継がれてきた教育研究の蓄積を大切にしつつ、現体制においても教育の質を確保できるよう取り組み

んでおります。一方で、社会や産業の変化に対応すべく、情報教育など時代の要請に即した新たな学びも積極的に取り入れております。伝統の継承と新しい教育内容との融合を図りながら、教育課程の整理と充実を進めてまいります。人的体制に制約はございますが、教員一同、歴史ある教育の歩みを大切に受け継ぎつつ、これからの社会を担う人材の育成に力を尽くしてまいります。今後とも、同窓生の皆様からの変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

それでは、当講座の5つの教育研究分野をご紹介します。

○応用環境情報学

(福島崇志教授、滝沢憲治准教授)

工学的手法を用いスマート農業の実現およびバイオマス利活用に資することを目的としております。農用車両の最適制御や走行性、センサ開発を含む農業情報システム、収穫後の生産物の流通システムなど食料生産に関連する教育研究、および半炭化やバイオディーゼルなどバイオマスエネルギーに関連する教育研究を行っております。

○生産環境システム学

(鈴木哲仁准教授)

生物生産や工業生産、環境などについて、安全・安心で環境負荷の低い生産システムの実現を目標としております。食料生産システムの情報化ならびに機械・設備の安全管理を軸に、情報工学やシステム工学、光や音による計測工学を用いて生物や作物、食品、機械・設備の品質や状態、性能を評価できる非破壊計測法、機械・設備システムの状態監視・診断法について教育研究を行っております。

○生物環境制御学

令和4年度に村上教授がご退職されて以降、現在は教員不在となっております。

○エネルギー利用工学

(呉婷婷助教)

再生可能な生物資源の利活用と低環境負荷型食料生産システムの自動化および効率化を目的としております。植物バイオマスを利用した生分解可能なバイオマス素材の開発、食料生産システムの自動化およびエネルギー有効利用のための農業機械の最適化に関する理論と技術について教育・研究を行っております。

○フードシステム学

(森尾吉成教授、内藤啓貴助教)

本教育研究分野では、食料の生産から、収穫、加工、パッケージング、輸送、流通、消費、廃棄へと繋がるフードシステムを対象とし、持続可能なフードシステム、フードシステムのスマート化、ロボット開発、農林水産物・食品の品質の情報化ならびに情報の取り扱い手法に関する教育と基礎・応用研究を行っております。

末筆ながら、本年1月2日に伊藤信孝先生がご逝去されました。私は直接ご指導を賜る機会はありませんでしたが、ご退職後もタイのチェンマイ大学などにおいて鞭を執られ、昨年2月にご帰国されるまで同地で活躍されていたと伺っております。先生のご功績に深く敬意を表しますとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

農業土木学講座

講座主任 岡島 賢治

農業土木学講座の動向と将来の展望についてお知らせします。令和6年度より、共

令和6年度水資源工学教育研究分野の伊藤良栄先生が准教授に昇進され、教育推進・学生支援機構全学共通教育センターに異動されました。教育・研究活動はこれまで通り水資源工学教育研究分野の協力教員として尽力されております。そして、令和6年度（2025年）2月1日にDixon千尋助

就職につきましては、近年の人手不足を背景に非常に良い状態が続いております。そのような中でも、関連する国や自治体、企業団体と連携しながら、実践的な教育ができる力キキュラムの改善に引き続き取り組む、農業土木技術者の育成に取り組んでいきたいと考えております。また、同窓会

主な研究テーマは、地域開発計画、土地利用計画、農村インフラの整備と管理、地域コミュニティの支援と活性化、環境保全と持続可能な開発、国際協力と農村開発などです。最近の話題としては、2024年

(近藤雅秋准教授、伊藤良栄准教授・藤山宗准教授(協力教員))

主な研究テーマは、水路の機能評価、水路の漏水検出技術、水路の水質評価、水路の流量特性解析、水路の維持管理システム、水路の改修・補強技術などです。最近の話題としては、2024年11月に第81回農業

主な研究テーマは、地盤改良技術の開発、地盤調査と評価、廃棄物の再利用と処理技術、地盤保護と環境保全、地域資源の最適活用、地盤改良と廃棄物利用の研究、地盤と植生の相互作用などです。最近の話

取出伸夫教授がご退職され、2026年度より坂井勝准教授お一人で教育・研究活動に尽力されています。主な研究テーマは、畑地の蒸発散に注目した土壌中の物質・熱移動のモニタリングおよび予測モデルの構築、土壌に投入された有機物の無機化や、

(渡邊晋生 教授・Dixon 千尋助教(協力教員))

協力教員として、Dixon千尋先生を加えた2名体制で教育・研究活動を行っていました。主な研究テーマは、水田や圃場の物理化学性の評価や温暖化に対する土壌有機物の保全など持続可能な農業システムの構築を旨とした研究と、土の凍結・凍上メカニズムの解明や土の凍結現象の地盤凍結工法や岩窟遺跡の保全などへの利活用に関する研究です。最近の話題としては、2025年9月に2025年度（第74回）農業農村工学会大会講演会において、博士前期課程1年の福田日穂さんが優秀ポスター賞を受賞しました。

專攻長筒井直昭

生物圏生命科学専攻（大学院）ならびに
関連学科およびコース（学部）の近況につ
いてご報告いたします。前号（17号）の木
村哲哉先生の記事にございました通り、学
部のカリキュラム体系が4学科体制から1

学科 4 コース体制へと変更されました。今年度は、令和 6 年度以降に入学した 1 ～ 3 年生が新体制、すなわち生命化学コース(生命機能化学専修・海洋生命化学専修)や海洋生物資源学コースで学んでおり、令和 5 年度以前に入学した学生(主に 4 年生)が生物圏生命化学科(生命機能化学コース・海洋生命化学コース)や海洋生物資源学科で学んでいるという、いささかややこしい状況です。

一方、専攻の体制はこれまでと同様で、博士前期課程においては、生命機能化学、海洋生命分子化学、海洋生物学の 3 講座から、博士後期課程については応用生命化学と海洋生物科学の 2 講座から構成されています。現在、博士前期課程には 137 名の学生が、博士後期課程には 16 名の学生が在籍しております。ここ数年は特に博士前期課程への志願者数が多く、入学定員の 2 倍を超えることもあります。結果として定員充足率も 100% を優に超えております。豊富な学生人材に支えられ、活発な研究活動が行われていると言えます。令和 10 年度以降には新カリキュラムで学んだ学部学生が大学院に進みます。定員超過への対策と併せ、大学院の体制にもそろそろ何らかの改変が必要であることは論を俟ちません。加えて、生物資源学校舎では改修工事が始まりました。工事期間のうち、各教育研究分野とも、最低 1 年間は住み慣れた場所を離れて仮住まいでの活動を余儀なくされます。ソフト面でもハード面でも課題は次々生じてまいります。専攻教員一丸となって対応していきたいと考えております。

本専攻に係るこの 2 年間の人事異動についてご報告いたします。新規採用教員として、令和 6 年 9 月に、ラムワイマン先生が生物海洋学教育研究分野の助教として、令和 7 年 1 月にはブーン・パーム・ラウウィン先生が分子細胞生物学教育研究分野の助教として、7 月には、渡邊裕基先生が藻類学教育研究分野の助教として着任いたしました。令和 8 年 4 月には李斌先生が食品生物情報工学教育研究分野の助教として、水澤奈々美先生が水圏生物利用学教育研究分野の准教授として、古川雄裕先生が浅海増殖学教育研究分野の助教として、それぞれ着任いたしました。また、三重大学研究基盤推進機構に令和 6 年 10 月に着任した井上香鈴先生は、海洋生態学教育研究分野の助教として活動しております。昇進に関しましては、令和 7 年度に磯野直人教授、田中礼士教授、柴田敏行教授(地球環境センタ―)、淀太我教授が、令和 8 年度には伯耆匠二准教授が昇進いたしました。ご退職関係としては、荻田修一教授が令和 7 年 3 月末をもって定年退職されました。また、八木原風助教授が令和 8 年 1 月末をもって琉球大学に転出されました。最後に、大変残念なご報告となりますが、令和 6 年 3 月末に退職されたばかりの海洋生物学講座の田口和典先生が令和 8 年 1 月に逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。

研究科の管理運営面では、本専攻の橋本篤教授が令和 7 年度から研究科長を務めておられます。また、松田浩一教授が研究科長補佐(研究)として、倉島彰教授が研究科長補佐(広報)として尽力されています。大学執行部においては、柿沼誠教授が副理事長として、木村哲哉教授が教育研究評議会委員として、それぞれ重責を担っておられます。

続いて、本専攻を構成する 3 講座の詳細

と近況を、各講座主任から紹介していただきます。

生命機能化学講座

講座主任 磯野直人

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素より当講座の教育・研究活動にご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

生命機能化学講座は大学院博士前期課程の組織であり、主に農芸化学を基盤とした教育研究を行っています。令和 8 年度の本講座の大学院生数は 54 名(M1・M2 各 27 名)で、ここ数年は学部から大学院への進学率が 60 ～ 70% と高い状態が続いております。また、学部では、旧カリキュラムに基づく生物圏生命化学科生命機能化学教育コースの 4 年生 53 名と、生物資源学科生命化学コース生命機能化学専修 3 年生 48 名の教育を担当しています。学生構成の面では、大学院・学部ともに女子学生の割合が高いことも特徴の 1 つです。令和 6 年に生物資源学部は 1 学科 4 コース制に改組され、改組後に入学し生命機能化学専修所属の学生が 3 年生となりましたが、当講座教員が担当する教育内容・体系には大きな変更はありません。大学院・学部ともに学生数が多く、学位論文発表会の発表時間が限られていたり、実験における 1 人あたりのスペースが手狭であるなどの課題もありますが、学生が充実した学習・研究活動を行えるよう、円滑な教育研究活動の運営に努めています。就職状況は概ね好調で、食品・化学・医薬品、分析などの各業界を中心に、多様な分野へ進んでいます。

令和 6 年度からは、コロナ禍で中止していた研究室対抗のスポーツ大会が復活しました。学生主体で企画・運営が行われており、毎年種目を変えるなどの工夫も見られ、学年間や研究室間の親睦を深めるイベントとなっています。

令和 7 年夏には、生命機能化学教育コース 3 年生 9 名が株式会社おやつカンパニー(三重県津市)で実施された「生物資源学インターンシップ」に参加しました。報道や店頭でご覧になった方もおられるかと思いますが、学生が企画・提案した新商品『ベビースタードデカイラーメン(レモン香る濃厚伊勢海老味)』が、令和 8 年 5 月から三重大学産学連携認定商品として全国で期間限定発売されました。本インターンシップは、生命機能化学講座教員も運営に携わり、大学と企業の連携のもとで実施されており、学生にとってキャリア形成における貴重な経験となっています。令和 8 年夏にも、生命機能化学専修 3 年生 9 名が同インターンシップに参加予定です。

前号以降の講座の人事についてご報告します。令和 7 年 1 月にブーン・パーム・ラウウィン先生(タイ王国出身)が分子細胞生物学教育研究分野の助教に、令和 8 年 4 月に李斌先生(中華人民共和国出身)が食品生物情報工学教育研究分野の助教に着任されました。お二人とも日本の大学院で学位を取得されており、日本語も大変堪能です。この 10 年間で、生命機能化学講座では女性教員や外国人数員の参画が進み、ダイバーシティが高まっています。多様な背景を持つ教員が集まることで、教育・研究のさらなる活性化が期待されます。また、令和 7 年 4 月に私、磯野が食品化学教育研究分野の教授に昇進いたしました。一方、令和 7 年

3月には苅田修一教授が定年退職されました。苅田先生は、三重大学副学長など学内の重要な役職を数多く務められ、教育・研究に多大な功績を残されました。また、食品機能学教育研究分野(連携機関・太陽化学株式会社)では、石原則幸連携教授と安部綾連携教授が退任され、清水一雄連携教授が着任されました。令和8年度には寺西克倫教授が、令和9年度には稲垣穰教授と木村哲哉教授が定年退職を迎えられる予定です。本講座を長年支えてこられた教員の退職が続きますが、講座教員一同、今後も質の高い教育・研究を維持・発展できるように努めて参ります。

現在の講座は12教育研究分野・教員20名で構成されております(うち、連携大学院が1分野・教員3名)。

○分子細胞生物学

竹林慎一郎教授、

ブーンパーム・ラウイン助教

○分子生物情報学

末原憲一郎教授、三宅英雄准教授

○生理活性化学

稲垣穰教授

○創薬化学

増田裕一准教授

○生物機能化学

勝崎裕隆准教授、岡咲洋三准教授

○生物制御化学

寺西克倫教授

○食品生物情報工学

橋本篤教授、李斌助教

○食品化学

磯野直人教授

○微生物遺伝学

木村哲哉教授、國武絵美准教授

○栄養化学

西尾昌洋准教授、栗谷健志助教

○食品発酵学

梅川碧里准教授

○食品機能学

(連携機関・太陽化学株式会社)

小関誠連携教授

小林純也連携教授

清水一雄連携教授

今後とも、生命機能化学講座の教育・研究活動に変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

▼自己紹介・Poonperm Rawin 先生……

2025年1月1日より生物資源学研究所生命機能化学講座分子細胞生物学研究室に助教として着任いたしました、ブーンパーム・ラウインと申します。日本では名前で呼び合うのが一般的ですが、私はタイ人なので、名前で呼ばれることに慣れています。そのため、私はよく「ラウイン」と自己紹介しています。

私はこれまで、細胞生物学、特にDNAや染色体に興味を持って研究を行ってきました。大阪大学大学院博士課程では細胞分裂時の染色体構造について研究し、その後神戸の理化学研究所で研究員として染色体機能やDNA複製に関する研究に取り組みました。その研究を通じて竹林慎一郎教授と長年共同研究を行ってきたご縁から、このたび本研究室の一員となりました。

私の現在の研究は、DNA配列そのものを変化することなく、どのように遺伝子の活性が変化するかを調べる「エピジェネティクス」に焦点を当てています。具体的には、染色体の構造がどのようにして遺伝子発現を制御しているかを研究しています。このような研究は複雑に聞こえ、日常生活とは

かけ離れているように思えるかもしれませんが、遺伝子の制御は私たちの体のあらゆる細胞で行われています。したがって、これらを研究することは、私たち自身をより深く理解する助けとなり、将来的には病気の治療に向けた新たな手法の開発など、医学研究に貢献する可能性があると考えています。

海外から来日し、三重大学の一員となる機会をいただいたことを大変光栄に思っております。日本の文化や習慣について学びながら、自身の国際的な経験を活かして、研究と教育の両面で貢献したいと考えています。まだ学ぶべきことも多くありますが、皆さんとともに、地域社会や社会全体に役立つ新しい知見を生み出していければ嬉しく思います。

▼自己紹介・李 斌 先生……

2026年4月1日より、生命機能化学講座・食品生物情報工学教育研究分野に助教として着任いたしました、李斌と申します。出身は、豊かな自然に恵まれた中国の黒龍江省です。研究への関心を深める中で日本へ留学機会を得て、2021年に来日いたしました。名古屋大学大学院生命農学研究科にて博士号を取得した後、博士研究員として研究を続け、このたび三重大学に参りました。

現在、世界では人口増加、気候変動、農業従事者の減少など、食と農を取り巻く課題が一層複雑になっています。安定した食料供給を将来にわたって支えるためには、食品の品質を適切に把握し、限られた資源を大切に利用していくことが重要であると考えています。

このような課題意識のもと、私はこれまで

で、光計測技術と計量化学手法を組み合わせ、食品およびその原料となる農産物の光学情報を解析することで、その品質特性を非破壊的に評価・可視化する研究を進めてきました。具体的には、作物の生育状態診断、果実品質(損傷や糖度分布)の三次元計測・可視化、制糖工場における糖度検量モデルの移転・適用手法の開発などに取り組んできました。これらの研究を通じて、食品の品質管理の高度化やフードロスの低減につながる技術の発展を目指しております。

今後は三重大学において、食品の成分・構造・機能を深く理解するため、原料生産から加工・流通に至るまでの計測・分析技術を幅広く探究します。豊かな農林水産資源と特色ある食品産業を誇る三重県に根ざし、研究を通じて地域産業の発展に貢献してまいりたいと考えております。

来日以来、多くの先生方や周囲の皆様に支えていただき、研究者として成長することができました。これまでの感謝の気持ちを胸に、本学の教員として、培ってきた経験と国際的な視野を活かし、学生一人ひとりの学びを支え、教育研究に励んでまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

■海洋生命分子化学講座

講座主任 柴田敏行

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。平素より海洋生命分子化学講座の教育・研究活動に多大なるご理解とご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

本講座では、海洋生物が有する多様な生

理活性物質や海洋資源の高度利用に関する研究を推進するとともに、海洋生物学・生化学・食品化学・分子生物学・分析化学を基盤とした教育活動を行っております。近年は、海藻由来多糖類やその分解産物の機能解析、水産生物由来成分の有効利用、海洋生物資源の高付加価値化、ブルーカーボンなど海洋資源を活用した持続可能な社会の実現に向けた研究活動にも積極的に取り組んでおります。

現在、本講座は、海洋生物化学教育研究分野、水圏生物利用学教育研究分野、水圏材料分子化学教育研究分野、生物物性学教育研究分野、生体高分子化学教育研究分野、海洋微生物学教育研究分野、水圏生物学教育研究分野（水産物品質学教育研究分野から名称変更）、海洋食糧化学教育研究分野から構成されています。令和七年四月には、新たに水澤奈々美教員が水圏生物利用学教育研究分野へ着任し、本講座の教育・研究体制がさらに充実いたしました。また、田中礼士教員（海洋微生物学教育研究分野）および柴田敏行教員（海洋食糧化学教育研究分野、地球環境センターを兼務）が教授に昇進し、講座運営の中核として教育研究活動を牽引しております。新しい体制のもと、教員間の連携を深めながら、学生教育および研究指導のさらなる充実に努めております。

学部教育においては、令和六年度の学部改組の際、新たに設置された当講座の教育ユニットである海洋生命化学専修に、本年度は三年生三十一名（三年次編入入学者一名を含む）が在籍しています。学生たちは、海洋生物資源の有効利用や海洋生命科学に強い関心を持ち、日々熱心に学業や研究に取り組んでおります。また、本講座では学

部卒業後も半数以上の学生が大学院生物資源学研究科博士前期課程へ進学し、より高度な研究に挑戦しております。大学院では、各教育研究分野において主体的に研究に取り組む、国内外の学会発表や論文投稿にも積極的に挑戦しております。

新型コロナウイルス感染症の影響が落ち着いた現在では、対面での講義・学生実験・研究活動もほぼ従来の形に戻り、研究室には活気が戻ってまいりました。学生同士や教員との議論を通じて学びを深める環境が整い、教育研究活動も一層活発化しております。

今後も海洋生命分子化学講座では、海洋生物資源の新たな価値創出と次世代を担う人材の育成に努めてまいります。同窓会会員の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

▼自己紹介・水澤奈々美先生………

このたび、2026年4月1日付で海洋生命分子化学講座、水圏生物利用学教育研究分野に准教授として着任いたしました、水澤奈々美と申します。

私はこれまで、北里大学海洋生命科学部において、水圏生物や微生物を対象として、食品、環境、健康に関わる研究に取り組んでまいりました。特に、伝統的な水産発酵食品であるイカ塩辛について、熟成に伴う呈味成分や香気成分、細菌叢の変化を解析し、塩辛特有の風味やおいしさがどのように形成されるのかを調べてきました。

イカ塩辛は、イカの肉と肝臓、食塩を用い、自己消化と微生物の働きによって独特の風味が生まれる食品です。わが国において古くから親しまれてきた一方で、近年は

健康志向や嗜好の変化により低塩分化が進んでいます。塩分を下げることは現代の食生活に合った製品づくりにつながりますが、発酵や熟成の進み方、風味の形成、品質の安定性にも影響を及ぼします。そのため、伝統的なおいしさを大切にしながら、現代の食生活や流通環境に合った安全で高品質な水産発酵食品を実現することが重要な課題であると考えています。

そのほか、水圏環境中の微生物群集、水産食品成分と健康、水圏生物を用いた水圏環境影響評価にも取り組んできました。水圏には、魚介類や藻類、微生物など多様な生物が存在し、食料資源として私たちの生活を支えるだけでなく、環境の保全や物質循環にも深く関わっています。私は、水圏生物の機能や生物同士の相互作用を明らかにすることで、食品の高付加価値化、資源の有効利用、環境保全に貢献できる研究を進めていきたいと考えています。

三重県は、伊勢湾や熊野灘をはじめとする豊かな水圏環境と水産資源に恵まれた地域です。この環境の中で、水産食品、微生物、水圏環境を結びつけた教育・研究を展開できることを大変うれしく思っております。学生の皆さんと、身近な疑問を出発点に、観察し、考え、発見する面白さを分かち合っていきたいと考えています。

まだ着任して間もなく、研究室もこれから少しずつ形づくっていく段階ではありますが、三重大学の発展と地域社会への貢献に少しでも力を尽くせるよう努めてまいります。今後とも、三翠同窓会の皆様にはご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

海洋生物学講座

講座主任 倉 島 彰

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。日頃より当講座・学科の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

令和6年の改組により生物資源学部は1学科3コースの体制となりました。海洋生物学講座の教員は海洋生物資源学コースに属しておりますが、同コースには資源経済システム学および地球環境学講座の教員も多く属しております。この改組によって、海洋生物資源学コースは海洋生物だけでなく、海洋環境やそれにかかわる気候、海洋資源の流通まで総合的に学ぶコースへと発展いたしました。生物資源学部棟では昨年から校舎改修工事が進められております。この改修は8年間という長期にわたる予定で、海洋生物学講座ではすでにいくつかの研究室が引越して作業に入っています。改修後は学部棟内での位置が変わる研究室もございます。皆様がご来訪された際は、それまで慣れ親しんだ研究室と少し異なった新鮮な風景でお迎えすることになるかもしれません。

海洋生物学講座の最近の教員異動についてご紹介いたします。令和6年9月に生物海洋学教育研究分野にJum Wat Mun先生が助教として着任されました。Jum先生は微細藻類の系統地理と生理生態や細胞構造を専門とされており、赤潮被害対策に貢献する成果もあげてこられました。同年10月には海洋生態学教育研究分野に井上香鈴先生が助教として着任されました。井上先生のご所属は研究基盤推進機構所属ですが、生物資源学研究科において教育研究活動を

進めていただいております。井上先生の主な研究課題は、腹足類をモデルとした動物の陸上進出史の解明で、伊勢湾などの干潟の生態系保全や種の保全に貢献する研究を展開されています。令和7年4月には魚類増殖学教育研究分野の淀太我准教授が教授に昇進されました。淀先生は淡水魚の生活史や生態、増殖・保全・管理に関する研究、外来魚対策について、すでに多数の業績をお持ちですが、これからさらに研究を推進していただきます。令和7年7月には藻類学教育研究分野に渡邊裕基先生が助教として着任されました。渡邊先生のご専門は海藻の生理生態学で、ノリなどの有用藻類の光合成能や藻場の生態について研究を進めており、三重県沿岸の水産業にとって大きな力となります。令和8年2月には鯨類学教育研究分野でご活躍していた八木原風助教が琉球大学に転出されました。令和8年4月には、水圏資源生物学教育研究分野の伯耆匠二助教が准教授に昇進されました。

松本才絵氏と村下幸司氏の後任として、山口寿哉氏と鈴木博史氏が連携准教授に就任されました。以上のように、この2年間で多くの若い先生が着任・昇進されたことにより、海洋生物学講座は大きく若返ることとなりました。令和8年4月現在の講座教員の構成は次の通りとなっております。

石川輝教授、Lum Wai Mun 助教
水族生理学

宮崎多恵子 准教授

藻類学

倉島彰教授、渡邊裕基助教

浅海増殖学

筒井直昭教授、古川雄裕助教

先端養殖管理学

一色正教授、北村真一准教授

魚類増殖学

淀太我教授

海洋生態学

木村妙子教授、井上香鈴助教

水圏資源生物学

伯耆匠二准教授

水圏分子生態学

河村功一教授

海洋個体群動態学

金岩稔准教授

応用行動学

森川由隆准教授

鯨類学

森阪匡通教授、船坂徳子准教授

附帯施設水産実験所

松田浩一教授(浅海増殖学)

岡辺拓巳准教授(水産応用情報学)

山本康介助教(浅海増殖学)

○附属練習船勢水丸

中村亨准教授(船長)

奥村順哉助教(二等航海士)

○発生・代謝機能解析学(連携大学院)

松本才絵 連携教授

山口寿哉 連携准教授

鈴木博史 連携准教授

海洋生物学講座では、この数年間大学院進学希望者が増える傾向にあり、令和6年度は23名、7年度には24名の大学院生が修士号を取得いたしました。令和8年度もほぼ24名の博士前期課程2年生が在籍しています。このように大学院生が増えたことで、研究もますます発展することが期待されます。一方で2年前の会報にもある通り、大学院生の増加に伴ってスペースの確保には苦勞することとなっています。特に、改修後工事中の影響で使用できなくなる教室もあり、毎回修論発表会の会場選びや発表時間の配分に苦心惨憺という、ある意味贅沢な悩みを抱えている状態です。

現在の海洋生物学講座は、これらの若い先生や大学院生に支えられて研究が進められております。研究に必要な資金も各教員が積極的に外部資金の獲得に努めています。いずこも同じで決して楽な状況ではありません。そうした中、当講座OBである三重大学水産学部一期会の皆様からは、卒業50周年を記念して募った寄附金をもとに、研究を助成していただいております。今回の研究助成は、伯耆准教授の研究課題「小型甲殻類ワレカラ属 *Caprella* の生態・進化研究の基盤としての系統的類縁関係の解明」に対して贈呈されました。この場を借りて御礼申し上げます。

以上、簡単ではございますが、海洋生物学講座の近況をお伝えいたしました。三翠同窓会会員の皆様には、今後ともご支援やご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

し上げます。

▼自己紹介・ラムワイマン先生………

二〇二四年九月一日より、生物海洋学教育研究分野に助教として着任いたしましたラムワイマンと申します。マレーシアの首都クアラルンプールで生まれ育ち、大学時代にはボルネオ島のサバ州に所在するマレーシア国立サバ大学に三年間在籍しました。在学中、毒化した二枚貝の誤食による死亡事故を知ったことをきっかけに、赤潮や貝毒に関わる環境問題へ強い関心を抱くようになりました。そして、赤潮研究が盛んな日本で専門的に学ぶことを志し、二〇一七年に東京大学大学院農学生命科学研究科へ進学いたしました。

大学院では、赤潮・貝毒原因プランクトンに関する系統分類学および生理生態学の研究に取り組み、六年間をかけて修士号および博士号を取得しました。その後は水産研究・教育機構において、有害渦鞭毛藻の分布拡大要因や集団構造に関する研究を進めてまいりました。

三重大学着任後は、中部地方沿岸域を主なフィールドとし、特に三重県沿岸における有害・有毒プランクトンの出現動態や関連する環境要因の解明に取り組んでおります。これにより、赤潮や貝毒被害の発生抑制に貢献することを目指しています。近年、五ヶ所湾では有毒渦鞭毛藻アレキサンドリウム・パシフィカムによる貝毒がほぼ毎年発生しており、ヒオウギガイやマガキの出荷制限が行われています。現在は、同研究室の石川輝教授と共同で、当海域における植物プランクトンの発生機構や、水温・栄養塩などの海洋環境との関連性について、定期的に現場観測に加え、各種顕微鏡観察

や分子系統解析を組み合わせながら調査研究を進めております。将来的には、地域行政機関や水産関係者との連携を深めながら、沿岸環境の保全ならびに赤潮・貝毒対策を通じて、地域水産業の発展に貢献したいと考えております。

研究活動に加え、生物資源学研究科および研究室運営にも携わっております。勢水丸練習船運営委員会、練習船教育関係共同利用運営協議会、国際交流委員会などに参加し、諸先生方から学びながら運営に貢献しております。また、海洋植物学実験や生物海洋学実習を分担し、卒業研究の指導にも力を注いでおります。学生が海洋生物や沿岸環境への理解を深めるだけでなく、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的に考え行動できる力を養えるような教育を目指しております。

最後になりますが、海洋環境に恵まれた三重大学において、生物資源の保全と持続的利用の重要性を次世代へ伝えていけるよう、今後も教育・研究活動に尽力してまいります。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

▼自己紹介・渡邊裕基先生……………

2025年7月1日より海洋生物資源学専修の藻類学研究室に助教として着任いたしました。渡邊裕基と申します。出身は愛知県常滑市です。前職は公益財団法人海洋生物環境研究所において約6年間研究員として勤務しておりました。また、直近の約1年間については一般財団法人電力中央研究所へ研究員として出向しておりました。

主な専門は海藻類の生理・生態学的研究で、博士号は「アマノリ類の光合成」をテーマとした研究で、鹿児島大学にて取得いた

しました。鹿児島大学は学部から学位取得までの9年間お世話になりました。潜水による海藻類の植生調査から、実験系による光合成の測定まで様々なことを学ばせていただきました。当時の教えをもとに、潜水による海藻のモニタリング調査のほか、水温をはじめとした海洋環境の観測、海中や実験室内での光合成の測定など、様々な手法を用いた研究展開を心掛けております。

また、前職においては、主に藻類に関する研究課題の遂行を担当しておりましたが、その他にも動物を使用した水槽実験や、海域環境や海産生物中の放射性物質濃度のモニタリングなど、多岐にわたる業務に携わってまいりました。専門とする藻類とは接点の薄い業務でしたが、今となってはこの経験によりできることの幅が大きく広がったと実感しております。今後も積極的に様々なことに挑戦していきたいと思っております。

三重大学においては、海に近いという立地や附属教育研究施設を活用して、積極的にフィールドに出かけたいと考えております。また、三重県の水産という視点で見ると、三重県は全国でも特に水産業が盛んな地域です。海藻類だけでも、ヒトエグサ(通称アオサノリ)、アマノリ(通称クロノリ)、ヒジキ、ワカメ、サガラメ(通称アラメ)などが挙げられます。しかしながら、近年の環境変動に伴う海藻類の減少はこれらの海藻産業への大きな打撃となっております。

これから学生との研究を通して、これらが抱える課題の解決に向けた研究にも取り組んでいきたいと考えております。至らぬ点など多々あるかと存じますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。

附属教育研究施設

附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンターから

F S センター長 名 田 和 義

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。令和8年度よりF S センター長を拝命しております園芸植物機能学教育研究分野の名田和義です。専門分野は園芸学、特に野菜園芸学を専攻しております。各施設長、練習船運営委員長、施設専任教職員と協力し、F S センターの発展に尽力して参りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

令和8年度現在の附帯施設長として、農場長に長菅輝義先生、次長に三島隆先生、演習林長に木佐貫博光先生、次長に沼本晋也先生、水産実験所長に松田浩一先生、次長に岡辺拓巳先生、練習船運営委員長に石川輝先生がそれぞれ活躍されております。

技術部では加藤元保技術長と上尾智洋副技術長のもと、教育研究、地域貢献、各種生産販売に取り組んでおり、令和6年4月1日付で樋口伸一技術員と上尾京子技術員が技術専門員へそれぞれ昇進されました。一方、令和8年3月31日付で川本茂史技術員が退職され、令和8年5月31日付で小嶋優人技術員が退職されました。

事務部では、令和8年3月31日付で中西美弥子チーム員が退職され、久保晴香チーム員が復帰されました。一方、令和8年4月1日付で山下城事務室長が異動されていきます。

練習船勢水丸では、令和6年4月1日付

で中村亨一等航海士が船長へ、奥村順哉二等航海士が一等航海士(通信長兼務)へ、高野雅貴三等航海士が二等航海士へ、それぞれ昇進されました。また、令和6年4月1日付で御手洗紫乃氏が三等航海士として採用され、令和6年9月1日付で二等航海士へ昇進されております。また、令和6年9月30日付で高野雅貴二等航海士が退職され、令和7年3月31日付で西岡正生甲板長が退職されました。令和7年4月1日付で平賀英樹甲板次長が甲板長へ、森憲一操舵手から甲板次長へそれぞれ昇進されております。また、令和7年4月1日付で村山瑞華氏が甲板員として採用されました。令和8年4月1日付で西中颯吾氏を員外通信士として採用しております。また、令和8年4月1日付で田畑直也操機手が操機長へ昇進されております。

F S センターは、先輩方がかつてフィールドで活動されていた頃と変わらず、学生たちが自然と真剣に向き合う「学びの最前線」であり続けています。現在、本センターは農場、演習林、水産実験所の3施設が連携し、山から海へとつながる「生命(いのち)の循環」を統合的に捉えるフィールド教育・研究を推進しております。近年、フィールド研究・教育におけるDX(デジタルトランスフォーメーション)導入推進が進んでおり、従来の「現場での体験」にデジタル技術を掛け合わせることで、「データの裏付けに基づく深い学び」や「場所・時間に縛られない共同学習」が可能になってきました。F S センターにおいても、デジタル技術を融合させたフィールドDX研究・教育の取り組みを進めています。令和7年5月に農場において「省エネ型植物工場・推進センター」を開設し、トマトやイ

農場だより

農場長 長 菅 輝 義

三翠同窓会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。本稿では、最近の農場の状況についてご報告申し上げます。

本農場は三重県津市高野尾町に位置し、伊勢自動車道・芸濃インターチェンジの近傍にあります。約35・2haの広大な敷地内には、水田、果樹園、水耕栽培温室、飼料作物圃場、牛舎、農産製造室などが整備されており、同一敷地内で農畜産物の実習・生産から加工・販売までを一貫して行う、全国的にも数少ない大学附属農場です。

講義室や調理室を備えた管理棟および学生宿泊施設は平成25年度に改修されました。また、老朽化が進んでいた栽培温室については、令和7年6月に旧茶園区画を活用し、高軒型植物工場とその運営を支える推進センターを新たに整備しました。推進センターの屋上には太陽光発電設備を設置し、発電した電力を植物工場の運用に活用するなど、再生可能エネルギーを取り入れた持続可能な施設園芸を実践しています。

令和8年4月時点での職員体制は、専任教員3名、技術職員8名（うち非常勤1名）、事務職員6名（うち非常勤2名）となっています。近年、食料の生産現場から離れた学生が増えていることや、フィールドを伴わない研究への懸念も指摘される中、実習のみならず共同研究や施設の共同利用を通じて、農場という「現場」を活かした教育・研究活動の一層の充実が期待されています。

農場で生産された農産物や、それらを原料とした缶詰、ジャム、味噌などの加工品

は、市内のスーパーマーケットや農産物直売所、道の駅などで販売されています。また、本農場は松阪牛の生産地域に位置しているという利点を活かし、三重県の特産である松阪牛の飼育・出荷も行っています。これらの取り組みを通じて、「三重大学」の名前が広く社会に知られるとともに、農場の生産活動が本学の広報にも寄与しています。

こうした取り組みの一環として、農場は令和2年3月にJGAP認証を取得しました。GAPは「Good Agricultural Practice（適正農業規範）」の略で、農業生産工程管理の国際的な基準の一つです。これまで本農場が継続してきた「食の安全」「環境保全」「労働安全」に配慮した取り組みが評価された成果の一つであると考えています。

近年、大学には社会貢献の役割が強く求められており、本農場においても教育・研究成果を地域社会に還元する取り組みを進めています。社会人を対象とした大学ファーム「楽農講座」では、農業技術の紹介や体験を通じて農業への理解と関心の向上を図っています。新型コロナウイルス感染症の影響により令和2～4年度は休止しておりましたが、令和5年10月から再開し、令和6年度には年間を通じた農業体験や食品加工実習を実施しました。さらに、受講者から寄せられた要望を受け、令和8年度からは実施回数を従来より1回から月2回へと拡充させました。

また、津市内の小学校、津市教育委員会、東海農政局と連携し、小学生を対象とした「三重大学教育ファーム」も実施しています。児童が農業体験や食品加工を通じて、食料が生産・加工される過程を学び、食への関心や感謝の心を育むことを目的として

います。令和7年度には、大里小学校の1・3・5年生を対象に、田植えやサツマイモの収穫、豆腐作りなど、計6回の実習を行いました。さらに、中学生を対象とした農業インターンシップの受け入れも行っています。

このほか、夏季に開講される共通セミナーにおいて三重短期大学の学生を受け入れ、本学による単位認定を行うなど、他大学との連携にも取り組んでいます。

農場の活動や最新のトピックにつきましては、随時ホームページ（<https://www.bio.nie-u.ac.jp/academics/facilities/fsc/farm/>）に掲載しております。ご興味をお持ちの方は、ぜひご覧ください。

平倉演習林の現況

演習林長 木佐貫 博 光

三翠同窓会の皆様には、お元気で活躍のこととお慶び申し上げます。令和6年度より林長を引き続き拝命しております木佐貫博光（資源循環学専攻森林資源環境学講座森林保全生態学教育研究分野）が、令和7年度までの演習林の現況についてご報告いたします。

【人事】

次長の沼本晋也准教授および洲上佑樹准教授、技術職員の上尾智洋さん（FSC副技術長・演習林グループ長）、山本拓史さん、上尾京子さん、小島優人さんの皆様には、管理運営ならびに学生実習対応を中心とした業務に携わっていただいております。令和7年4月、鶴田健二准教授が新規に採用されました。また、長年にわたり業務に携わってこられた非常勤職員の新田昌臣さん

チゴを対象にCT・IoT技術を用いた高度な環境制御と栽培データの蓄積を行っています。演習林では、広大な面積を持つ演習林の状況を正確かつ効率的に把握するためのデジタル技術が活用されており、ドローン、航空レーザー計測、GIS（地理情報システム）などを活用し、スマート林業を軸としたフィールドDX研究・教育を行っています。水産実験所では、2021年に本学、三重県、鳥羽市、KDDIなどの産学官6者で「海洋DX」推進に向けた連携協定を締結し、スマートブイ・空中／水中ドローンの活用、AI・ビッグデータ解析などの実証実験を進めており、地域固有の資源を守り、持続可能な漁業を実現するためのデジタル活用を進めています。

このように時代とともにフィールド研究および教育のDX導入や最新の観測技術など、研究のスタイルは進化を遂げておりますが、その根底にある「現場主義」の精神は、生物資源学研究科が長年培ってきた揺るぎない伝統です。社会の第一線で活躍されている皆様が、かつてこのフィールドで培った「生き抜く力」や「自然への畏敬」は、今後も後輩たちへと確実に引き継がれています。

本センターは今後も、地域に根ざし、かつ世界に開かれた研究拠点として、持続可能な社会の実現に貢献してまいる所存です。同窓生の皆様におかれましては、ぜひ折に触れて母校のフィールドへ足をお運びいただければ幸いです。

が退職され、尾関香さんが技能補佐員として採用されました。

【教育・研究】

三重大学では、伝統的に現場で活躍できる人材の育成に重点を置いた実習の力リキュラムを組んでいます。令和 6 年度に実施された本学学生を対象とした実習は次のとおりです。

FSC 演習林実習Ⅰ (写真Ⅰ)

(森林植物学、森林 2 年生対象)

FSC 演習林実習Ⅱ

(測量学、森林 2 年生対象)

FSC 演習林実習Ⅲ

(森林利用学、森林 3 年生対象)

FSC 演習林実習Ⅳ

(森林計測学、森林 3 年生対象)

FSC 演習林実習Ⅴ

(公開森林実習、森林 3 年生対象)

特別調査研究特別実験

(大学院博士後期課程学生対象)

演習林体験演習 (学部 1 年生対象)

自然科学概論―森は生きている―

(教養教育／農林体験セミナー)

研究での利用については、「ナラ枯れ被害防除調査」が継続して実施されました。

その成果は、令和 6 年度三重大学技術発表会 (第 32 回) において、演習林技術職員によって報告されました。また、三重県との共同研究「人工林流域における流木発生抑制技術の開発」が行われました。その他、関連する教育研究分野の調査研究において、「森林作業における熱中症リスクの可視化と共有システムの構築」、「スギ人工林固定成長試験地の調査」、「天然林の動態ならびに植物の生態に関する研究」、「温暖化処理による土壌線虫群集の変化の解明」について、データ収集や試験地整備などの研

究補助を行いました。

令和 7 年度全国大学演習林協議会秋季総会において、山本拓史さんが、森林管理技術賞のひとつ「学術貢献賞」を受賞されました。受賞理由は、「三重大学演習林に生息する野生動物の継続的な記録およびデータの収集及び公開」です。

【地域連携・社会貢献活動】

演習林では、地域連携と社会貢献のために教育・研究の場を提供して参りました。具体的内容を以下に列記します。

○協定校ブトラマレーシア大学 (UPM、マレーシア) の社会人大学院生と引率教

員の訪問を受け入れ、その一行と生物資源学研究科教員および学生ならびに演習

林教職員とが交流した (写真 2)。

○間伐および作業道整備で伐採した支障木

の丸太などを美杉木材市場などに出荷。

○美杉木材市場の「木の駅プロジェクト」

(未利用材買取り) における木質バイオ

マス発電用に間伐材の一部および作業道

整備の支障木材などを出荷した。

○林内の人工池で育てた養殖アマゴを、雲

出川の放流用などとして出荷した。

○生物資源学部棟 2 階 D ゾーン (森のエリ

ア) にリニューアルした演習林ポスター

を設置した。

○令和 6 年度東海地区大学演習林等技術職

員研修を三重大学演習林主催で開催し

た。研修テーマは「三重県中央部の林業

地域にて、企業見学を通して現在の木材

利用、木材市況および木材需要等の知見

を学ぶ」であった。

【林況】

シカの頭数が過剰な状態は依然として継

続しており、人工林の主伐も植林もとも

なされておりません。人工林では、利用間

伐などが行われています。天然林では、主稜線を被っていたミヤコザサやスズタケがすっかり姿を消し、下層植生はさらに衰退し、見通しがよくなりました。障害物が減ったために歩きやすくなったものの、歩道の正確な位置が不明瞭な場所が増えることになり、一般の方を立ち入らせることが困難な状況です。

これからも、演習林の豊かな森林環境を少しでも数多くの学生に知ってもらうとともに、少しでも良い状態で次世代に引き継ぐべく、維持管理して参る所存であります。何卒よろしくお願い申し上げます。



写真1. 2025年5月の演習林実習



写真2. ブトラマレーシア大学の訪問

▼自己紹介・鶴田健二先生……………

2025年4月1日付けで演習林に准教授として着任いたしました。鶴田健二と申します。森林水文学を専門としており、これまで、スギ・ヒノキ人工林の蒸発散の定量化や、森林管理が水資源に及ぼす影響評価などを行ってきました。私は演習林の専任教員として演習林に常駐しています。毎日車で片道1時間かけて、津市美杉町の演習林に通勤しています。

前職は、滋賀県の公設試験研究機関である琵琶湖環境科学センターの研究員です。県が抱える森林政策上の課題を解決するために研究を行うとともに、セミナーなどを通じて県民の方に広く研究成果の発信を行ってきました。大学教員として職に就くのは今回が初めてとなります。学生実習や講義は始まっていますが、まだまだ自身に工夫が足りないと感じることが多く、日々勉強の毎日です。

私は学部生時代を愛媛大学で過ごし、工学部で土木を学んでいました。卒論時に都市計画の研究室に配属され、市街地での人々の回遊行動(複数の場所を訪れる行動)を調べる中で、都市緑地・公園の役割をより専門的に学びたいと思うようになりました。これがかきつかけで九州大学大学院の農学・森林系に進学し、森林や緑地の水循環の研究(水文学)を始めることになりました。九州大学では所属研究室が演習林にあつたため、院生時代も演習林に通う毎日でした。学位取得後、九州大学演習林を離れましたが、縁あって三重大学の演習林で教育・研究を行う機会をいただきました。地球規模では気候変動が進む中で、日本では人口減少が進み、森林を取り巻く気候も社会的背景も大きく変化しています。これから私

たちは森林とどのように付き合っていけばよいのか。これが私の今の問いです。研究対象は森林ですが、森林ばかりに目を向けず、広い視点を持って演習林で教育・研究を行っていきたいと考えています。皆様、どうぞよろしく願います。

水産実験所だより

水産実験所 松田浩一

三翠同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。日頃より水産実験所へのご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

水産実験所の近況を報告いたします。英虞湾の座賀島にあった水産実験所が令和3年4月に鳥羽市小浜町に移転し、令和8年4月で5年が経過しました。小浜町の漁師さん達には鳥羽湾での魚類生態調査に協力してもらったり、カキ養殖のカゴに付着するムラサキイガイを研究用イセエビの餌として提供してもらったり、また、小浜町の住民を対象とした公開日を設け見学に来てもらったりと、地域の皆さんといい関係を築くことができ馴染んできていることを実感しています。こうした環境のもと、前号(17号)では移転後3年間の様子をお伝えしましたが、それ以降は大きな変化もなく、着実に教育研究活動を進めている状況です。スタッフの構成も、浅海増殖学を専門とする松田(教授)と山本康介助教、水産応用情報学の岡辺拓巳准教授の3名の専任教員、技術専門員1名、用務員1名の5人体制で変更はありません。

水産実験所での教育活動としては、臨海実習(学部2年生)、屋外活動のリスク回

避や岩礁域での生物サンプリング等を安全に行うための知識と技術を学ぶフィールド科学技術実習(学部2年生)を行うとともに、大学院博士後期課程の特別調査研究、学部1年生が附属教育研究施設のことを知るきっかけとなる体験演習も担当しています。令和8年度後期からは海洋情報学実習(学部3年生)も始まります。これらの他、上浜の教員による浅海増殖学実習、藻類学実習等もあり、生物相が豊かで多様な漁業が営まれている伊勢湾口部に位置する水産実験所の特長を活かした様々な実習を実施しています。また、水産実験所に分属している学生は大学院生8名、学部生8名で(令和8年4月現在)、それぞれの博士・修士研究や卒業研究に励んでおり、毎日が賑やかに過ぎていきます。

研究面では、沿岸水温の上昇による藻場の衰退を背景として、アワビやサザエ、マナマコ等の水産資源が減少しており厳しい状況にある海女漁業を支援するため、これらの魚種の資源量変動メカニズムや増殖の研究を実施するとともに、やはり沿岸漁業の重要な対象種であり、漁獲量の減少傾向が続いているイセエビやサワラ等の安定漁獲を目指した研究も実施しています。また、沿岸環境の変化をセンシング技術の活用によって迅速に捉える研究や水産業のスマート化を進めるための研究、変化する沿岸環境に適応し漁業の持続化を進めるための研究、地球環境の温暖化への対策として海域による炭素貯留(ブルーカーボン)を拡大させるための研究、効果的な海洋教育メニュー開発や海洋教育の効果の評価手法の開発等様々な研究活動を実施しており、幅広い研究活動が水産実験所の特長となっています。

地域貢献活動としては、前号でも紹介しました、鳥羽市と三重大学大学院生物資源学研究科で設立した「鳥羽海洋教育研究センター」の取り組みとして、地域の魅力を発見し、郷土愛を育む海洋教育に鳥羽市とともに取り組んでいます。また、伊勢志摩地域には全国的にも類を見ない規模で海洋水産に係る教育研究機関が集積しており、それらの機関が連携して設立した「伊勢志摩海洋教育アライアンス(三重大学、名古屋大学臨海実験所、ミキモトグループ、鳥羽水族館、鳥羽市、(国研)水産研究・教育機構(水産技術研究所)、鳥羽商船高等専門学校、三重県水産研究所の8機関が参画)」の活動も広がりを見せ、共同での調査や研究活動を行うとともに、授業や実習にも協力していただいております。本学の学生に対して先端研究の様子や地域の実情に触れる機会を提供していただいております。また、伊勢志摩地域の一般の人々を主な対象として、共同での「研究成果等発表会」も開催しており、アライアンス参画機関の活動の様子や研究の成果を知っていただく機会を設けています。OBの皆様方にもぜひお越しいただきたいと思います。

三重県における沿岸環境は、7年以上も継続した黒潮の大蛇行の影響で大きく変化しました。多くの海域で藻場が衰退し、魚類相も南方系の魚種が増え、一昔前とは様変わりです。その変化は漁業生産にも暗い影を落としており、黒潮の大蛇行が始まる前年(平成28年)の漁獲量と比較して令和6年の漁獲量は、アワビ類で30%、サザエ23%、イセエビ48%に留まり、海女漁業の存続も危なくなっています。磯根資源だけでなく魚類の漁獲量も大きく減少しており、近年の5年間で三重県全体の漁業生産

量は半分以下にまで減少し、この減少率は全国でも最大となっています。沿岸水温の急激な水温上昇の要因となった黒潮大蛇行は令和7年4月に終息し、昨年の秋以降は水温が平年並みで推移しています。姿を消していた水産資源が戻ってきてくれることを期待していますが、海域での生物の行動や移動、藻場の再生力等分かっていないことが多く、どうなるのか見守っている状態です。海域の生態系が、海流の流路変化や、影響を受けて変化することは仕方がないことであり、漁業生産もそれに適応していくことが求められます。生産現場に近い場所にある水産実験所では、漁業者や漁業団体、自治体と連携しながら、現状の把握や環境の変化に対する適応策の検討等の取り組みに今後も力を入れていきたいと考えています。これからも、地域に頼りにされる水産実験所となるように教職員一同、努力してまいりますので、同窓会の皆様方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしく願います。

練習船勢水丸近況報告

附属練習船勢水丸

船長 中村 亨

会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。附属練習船勢水丸です。本船の近況についてご報告いたします。

本紙令和6年第17号にて近況をご報告してから、早くも2年が経とうとしています。この間、新型コロナウイルス感染症等への対策として実施されていた各種制限はほぼ

緩和され、本船においてもほぼ通常どおりの運航体制へと戻ることができました。現在も、感染症対策として 2 人部屋を 1 室隔離室として確保する対応は継続しておりますが、それ以外については以前の運航形態を取り戻し、学生実習や調査研究活動も活発に行えるようになっていきます。昨年度の運航実績を簡単に紹介しますと、教育(実習)航海が 24 航海・延べ 87 日・乗船学生延べ 436 名、調査・研究航海が 8 航海・延べ 46 日・乗船者延べ 107 名、地域・社会貢献航海等が 2 航海・延べ 4 日・乗船者延べ 21 名でした。その他の航海として定期検査工事に伴うドック回航を実施しており、年間を通じて多岐にわたる活動を行いました。

教育航海では、観測技術や漁業技術の習得のみならず、海上という特殊な環境の中で協調性や責任感を養うことも重要な目的となっています。限られた空間で共同生活を送りながら実習に取り組む経験は、学生にとって非常に貴重なものとなっているようです。近年はコロナ禍の影響で乗船機会や実習内容にも制約がありました。が、ようやく従来に近い形で実施できるようになり、船内にも以前の活気が戻ってきたと感じています。また、一昨年度からはカイト式 LC ネット(従来のオッターボードの代わりに、カイト状の装置を網口に取り付け、水流抵抗を利用して網口を広げる底引き網。網の規模自体は従来型のトロールネットとほぼ同等)を用いたトロール実習も再開しています。一昨年度には、コロナ禍以前久しぶりとなる東シナ海での実習を実施しましたが、昨年度は初めて熊野灘海域へ操業海域を変更して行いました。操業海域変更の背景には、海況悪化による日程調整

の難しさ、燃料価格の高騰、さらには乗組員不足といった複数の要因がありました。しかし、結果として熊野灘海域では東シナ海とは異なる魚種や漁獲傾向を観察することができ、学生たちにとっても新鮮な経験となりました。さらに昨年度は、勢水丸として初めての港にも寄港する機会がありました。教育航海では神戸港(阪神港神戸区)へ寄港し、実習学生とともに古野電気本社を見学させていただきました。船舶用電子機器や音響機器の分野で世界的に知られる企業であり、学生たちは普段船上で使っている機器がどのような技術によって支えられているのかを学ぶ貴重な機会となりました。最新の音響機器・航海機器に実際に触ること以外にも、研究開発の最前線についてもご紹介いただき、参加した学生はもとより、引率した私や航海士にとっても大変有意義かつ刺激的な見学となりました。また、研究航海では、東北沖において海洋研究開発機構(JAMSTEC)の新青丸との 2 隻同時観測を実施しました。この際には塩釜港(仙台塩釜港塩釜港区)へ入港しました。7 月初旬ではありましたが非常に暑く、東北地方のイメージとの違いに驚かされたことをよく覚えています。他機関との合同観測は、研究面での連携強化のみならず、学生や乗組員にとっても多くの学びを得られる貴重な機会となりました。

すでに今年度も、運航計画に沿って各種航海が順次開始されています。しかしながら、先にも少し触れたように依然として人員不足という大きな課題を抱えている状況は続いています。そのような中、昨年度には新たに甲板員を迎え、本船初となる女性甲板部員が誕生しました。船内環境や作業体制の整備など、新たに対応すべき点も

ありましたが、乗組員全体で協力しながら環境づくりを進めています。加えて、5 年ぶりに勢水丸へ卒業論生を迎え入れることとなりました。彼は学部生時代から練習船への関心が非常に高く、実習航海も積極的に参加していた学生で、4 年次には卒業研究データ取得のため数多くの航海に乗船してきました。船上での作業や生活も十分経験し、今年度から新たな乗組員として迎え入れることになりました。しかしながら、乗組員数は依然として定員には達しておらず、現在も 1 名欠員の状態が続いています。そのため、乗船される先生方には調査時間の制限等でご不便をおかけしているのが現状です。限られた人数で安全運航と教育・研究活動を両立するため、乗組員一同、日々工夫を重ねながら業務に取り組んでいます。

本船は建造から 17 年が経過しました。毎年のドック検査・工事については大きな問題なく終えることができていますが、船齢を重ねるにつれて各所に経年劣化が見られるようになってきています。搭載機器や観測機器についても、建造当初は最新鋭であったものの、現在では部品供給が終了している機器も増えており、修理対応が困難となるケースも少なくありません。機器更新の必要性を感じる場面も増えています。が、限られた条件の中で整備・維持管理に努めています。そのような状況ではありますが、安全航海の成否を何よりも優先しながら、教育効果の高い実習航海、質の高い調査・研究航海、そして地域・社会貢献活動のさらなる充実にも努めてまいります。附属練習船としての役割を果たし続けられるよう、これまで以上に緊張感と責任感を持って運航に取り組んでいく所存です。最後になりますが、今後とも会員の皆様

からの変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げますとともに、皆様のおますすのご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

本船 H P (<https://seisumaru.bio.mie-u.ac.jp/>)
本船 Instagram



写真…阪神港神戸区入港中の勢水丸

研究基盤推進機構 鯨類研究センター

森 阪 匡 通

鯨類研究センターは、2016 年 12 月に研究科内の附属教育研究施設のひととして設置され、約 7 年半の間、研究科内の組織として活動してまいりました。2024 年度からは、三重大学を代表する一つの特色ある研究組織であることから、全学組織である研究基盤推進機構内の一センターとなり、研究科内の一組織ではなくなりました。しかし、所属教員はすべて研究科所属であることから、研究科とは関連の深い施

設として、ここでご紹介させていただきます。

現在の体制としましては、センター長に学部長・研究科長の橋本篤教授、鯨類学を専門とする2名の教員(森阪匡通教授・船坂徳子准教授…いずれも兼務)、1名の技術補佐員(神田育子氏)、そして研究員として、これまで鯨類研究センターを率いてくださった吉岡基名誉教授を加えた5名体制となっています。なお、2024年4月より所属していた八木原風助教(任期3年)が、2026年2月より琉球大学に任期の定めのない助教として異動されました。

本センターの所属員のうち、私を含め2名が子育ての真っ最中で、時間の確保の難しさがああり、さらには遠距離通勤など難しい課題に直面しつつ、常にワークライフバランスとは何かを考えながら研究を進めています。また、私と船坂先生が本務として教育研究活動を行っている、研究科内の鯨類学研究室には、イギリスからの国費留学生(D2)が所属し、また台湾からの特別聴講学生を受け入れるなど、ダイバーシティ豊かな環境です。ダイバーシティ・インクルージョンについて、学生とともにセンターのメンバーみんなで考えながら、鯨類のあれやこれやを楽しく議論しております。

本センターは、総合研究棟ⅡB内に4部屋を借りて研究活動を行っています。水族館等において、鯨類の持続的飼育を進めるための繁殖研究基盤を整備するためにセンターが設置された経緯があり、特に繁殖生物学や生理学の分析ができる様々な機器を揃えております。そして学内の他の先生方がこうした機器を使うように共同利用の体制を整え、少しずつではありますが、利

用いただいています。国内の様々な水族館に飼育されている鯨類の繁殖やストレスに関連するホルモンに関する基礎研究や、人工授精のためのイルカの精子の凍結保存に関する研究などを行っています。

一方、研究室を出て、野外や水族館での観察研究も多く行っています。吉岡先生が三重大学に着任後に始められた、小型の鯨類であるスナメリのストランディング調査(おもに海岸などに死んで打ちあがったスナメリの体長や性別など測定し、必要に応じてサンプルを取得し、最後に海岸に埋める調査)は、30年以上継続しており、重要な情報が蓄積されています。この1月にいくつかの水族館や博物館、行政機関、他大学などとともに、「伊勢湾・三河湾ストランディングネットワーク(IMBSN)」を立ち上げ、スナメリをはじめとした本地域の鯨類のストランディング事案に対し迅速かつ適切な対応(救護や調査・標本採取)を行える体制を整えました。また、ここ数年は、三重大学の目の前にある町屋海岸などで、目視観察とドローンの調査も行っております。こうした地域に暮らす動物を、地域の子供たちが知り、それを誇りに思うことも大切と考え、三重県総合博物館をはじめ、三重県内の小学校などでの学習会も開いています。研究等の広報活動も積極的に行っております。

今後も研究科とは深くかわりあいながら、教育研究活動を展開してまいりますので、同窓生の皆様におかれましては、引き続き本センターの活動を見守っていただければ幸いです。

大学院 地域イノベーション学研究所

諏訪部 圭 太

平成21年に発足した地域イノベーション学研究所は、工学・バイオ・人文社会科学を基軸となる学問領域として位置づけ、これらを専門とする学者・研究者が本学の各学部から結集した文理融合型の学際的独立大学院です。在籍する学生も多彩であり、博士前期課程・後期課程いずれにおいても、一般学生・社会人学生・外国人留学生が集い、専門分野や年齢、社会的立場の異なる多様な人材が共に学んでいます。

このように、本研究科の特色と強みは、学問領域の学際性と教員・学生を含めた構成員の高い多様性にあり、既存の学問体系にとらわれることなく新たな知の創出を志向する独創的な教育研究組織である点にあります。教育においては、文系・理系の枠を超えた教養人としての基盤となる総合知を涵養するとともに、各専門分野における高度な専門力を磨き上げ、これらを兼ね備えた高度専門職業人および研究者の養成を目標としています。さらに、専門力の涵養にとどまらず、目標設定や課題解決を俯瞰的に捉え遂行するためのプロジェクトマネジメント力の育成にも注力しており、研究力・専門力の養成を担うR&D教員とプロジェクトマネジメント力の育成を担うPM教員が連携する「サンドイッチ方式教育」を導入し、研究力とマネジメント力を兼ね備えた人材の育成を推進しています。これらの取り組みにより、「総合知+専門知+マネジメント力」を三位一体で備えた人材の育成を目指しています。

また大学院教育にとどまらず、地域と共に新たな価値創造のムーブメントを共創する拠点として、「地域イノベーションのハブ」となることも目指しています。その一環として、産学官連携による共同研究の積極的な推進に加え、社会人の学び直しの場としてのリカレント教育およびアントレプレナーシップ教育の充実にも取り組んでいます。三翠会員の皆様におかれましては、ぜひ本研究科における共同研究や学び直しをご検討賜りますようお願い申し上げます。

前号『三翠』発行以降、令和7年3月に荻田修一教授(化30)、令和8年3月に小林一成教授(農31)がそれぞれ定年退職されました。現在、本研究科には三翠会員として、野中章久教授、諏訪部圭太教授(生H10)、狩野幹人准教授(機H6)、加賀谷安章准教授(博H10)が在籍しております。また、かつて専任教員としてご尽力いただいた三島隆准教授(化29)には、現在も兼担教員として引き続き教育にご貢献いただいております。

設立から17年を経て、大学院としての組織・体制は着実に整備されてまいりましたが、社会の変化は極めて迅速です。近年では、いわゆる「2040年問題」に象徴される18歳人口の減少が全国の大学にとって大きな課題となっており、本研究科にとっても決して例外ではありません。そのような状況においても、社会の多様なニーズに柔軟に応え得る大学院としてなお一層の精進を重ねてまいります。今後とも、生物資源学研究所と併せて、本研究科の取り組みに温かいご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

恩師を偲んで

幹渉先生を偲ぶ

柿沼 誠

富士化学工業株式会社取締役副社長や株式会社M&K代表取締役社長などを務められるなど、産業界においても幅広く活躍され、基礎研究から製品開発に至るまで数多くの成果をあげられました。

幹渉先生は、令和8年2月にご逝去されました(享年74歳)。温厚でありながら果敢なお人柄と卓越したご指導に接してきた海洋生物化学教育研究分野の関係者一同、深い悲しみに包まれております。先生は長年にわたり学術界および産業界の第一線で活躍され、教育・研究の両面において多大なご功績を残されました。ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、関係者一同を代表して先生のご業績とお人柄を偲び、感謝の念を記したいと存じます。

幹先生は東京大学農学部水産学科をご卒業後、同大学院農学系研究科に進学され、農学博士の学位を取得されました。学位論文「養殖魚のカロテノイド代謝に関する研究」では魚類体内におけるカロテノイド変換を解明され、その成果は広くスズキ目魚類の養殖に応用されるなど、カロテノイドの栄養化学的重要性を見い出されました。大学院修了後は財団法人サントリー生物有機化学研究所にて研究者としての歩みを始められ、株式会社海洋バイオテクノロジール研究所研究室長、サントリー株式会社健康食品開発部長やサプリメント食品開発研究所長などの要職を歴任されました。さらに、

このように企業の研究開発者および経営者として豊かな経験を積まれた後、平成22年に三重大学大学院生物資源学研究科に教授として着任されました。当時の海洋生物化学教育研究分野は、私が准教授の一人体制となつて3年が経過しており、講義や学生指導の重責から教育研究活動が停滞しかねないほど疲弊しておりました。それだけに、経験豊かな幹先生のご着任は大変心強くなり、教育研究分野の状況を一変させる転機となったことを今なお鮮明に記憶しております。着任後は海洋生物化学や海洋天然物化学を中心に教育・研究に従事され、7年間という在任期間でありながら、学術的な貢献にとどまらず研究科の組織運営などにも尽力され、広範な領域において極めて大きな足跡を残されました。

領域の開拓など、いずれも独創性に富み、学術的意義のみならず社会的波及効果の大きな成果を数多く残されました。教育面においては、学部・大学院の講義や研究指導を通じて約30名の学部生・大学院生を社会へと送り出されたほか、他分野の学生の論文審査や研究指導にも分け隔てなく尽力されました。

海洋生物化学教育研究分野の関係者にとつて特に印象深いのは、幹先生のご指導のあり方でした。常に自由闊達な発想を尊重される一方で科学的議論においては極めて厳密であり、論理の飛躍や表現の曖昧さは決して許されませんでした。研究発表の場では、学生の考えを丁寧に引き出しながらもその本質を問う鋭い問いかけが続き、そうしたやり取りを経た学生たちは格段に理解を深め、堂々と議論を展開できるようになりました。一方で非常に温かいお人柄でもあり、研究に悩む学生には時間を惜しまずに寄り添い、時にはお酒を酌み交わしながら温かい励ましの言葉をかけておられました。また、季節ごとの節目には率先して賑やかな席を設け、雑談の中から生まれる新しい着想を大切にされていました。こうした姿勢は、教育研究分野に自由で開かれた空気をもたらし、多くの学生が主体的に研究に取り組む原動力となっていました。

幹先生はさらに、学会活動においても指導的役割を果たされました。日本農芸化学会やマリンバイオテクノロジール学会の理事を歴任され、日本カロテノイド研究会では長年にわたり会長としてその発展に尽力されました。カロテノイド研究における国際的な情報発信および研究者間の交流促進に

において中心的な存在であり、その功績は広く認められております。社会連携においても先生は常に先駆的であり、企業や公的機関との共同研究を積極的に推進されるところに、社会連携推進室長として生物資源学研究所オーブンラボの創設・運営や展示会での研究成果の発信に尽力されました。また、市民講座や高大連携事業を通して科学の魅力を広く社会に伝え、大学の社会的役割の強化にも寄与されました。

私をはじめ教育研究分野の関係者にとつて、幹先生は教育・研究の在り方を示してくださる存在でありました。研究テーマの着想における大胆さと緻密さのバランス、研究成果を社会へとつなげる視点、そして人を育てることの重要性は、先生の日々の言動を通して私たちに伝えられ、その教えは現在も教育研究分野の中に息づいております。卒業生にとつても先生のご指導のもとで培われた経験は、現在それぞれの分野で活躍する上での大きな支えとなっていることと確信しております。先生が築かれた学問的基盤と人的ネットワークは、今後多くの研究者・技術者によって受け継がれていくことでしょう。私もご期待に応えるべく、教育・研究に一層精進していく所存であります。

最後になりましたが、幹渉先生が海洋生物化学教育研究分野に遺してくださった多大なご功績と、私たちに注いでくださった温かいご指導に改めて深く感謝申し上げます。先生の輝かしい足跡をここに讃え、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

田口寛先生を

思ん

竹林 慎一郎

田口寛先生は、病氣療養中のところ、2024年4月25日にご逝去されました。享年77歳でした。先生は1974年に三重大学農学部農芸化学科の助手として着任され、1994年からは前任の嶋林幸英教授の後を継ぎ、生物化学研究室(現・分子細胞生物学研究室)の第3代教授として、教育・研究・管理運営にご尽力されました。2010年の3月に定年退職されるまでの実に35年10ヶ月の長きにわたり三重大学の教員として勤めあげられました。ご専門はビタミンであり、とりわけ大学院時代から取り組まれていたナイアシン(ビタミンB3)に関して、数多くの研究成果を挙げられました。今でこそ、ナイアシンやその関連化合物は健康長寿との関連で広く知られるようになりましたが、先生は早くからそれらの生理作用に着目し、先駆的な研究を推進されたとともに、一般向けにもその知識の普及に尽力されました。こうしたご功績により、2023年には日本ビタミン学会功労者表彰を受けられています。

以下、生物化学研究室の卒業生の一人としての私自身の思い出に加え、他の卒業生からも伺った話も交えながら、書かせていただきます。私が初めて田口先生を知ったのは、生物資源学部の学生として農芸化学コースの専門の講義を受講したときでした。今から30年ほど前のことになりました。いつもスーツにネクタイというきちんとした装いの先生のお姿を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。講義は大変わかりやすく、内容そのものも興味深いものでしたが、それ以上に、講義の合間に語られるさまざまな話が記憶に残っています。例えば、先生は海外のさまざまな場所を訪れては、現地の様子やそこでの体験を語ってくださいました。毎年クリスマスにニューヨークを訪れていたというお話などは、今でもはつきりと覚えています。先生の主催する生物化学研究室に私が配属された後もそれは変わりませんでした。時には大学の食堂や近くのレストランに連れて行っていたとき、ご馳走になりながら先生のお話を伺ったことがあるという卒業生は何人もいるのではないのでしょうか。先生には、人を喜ばせたい、楽しませたいというお気持ちがあつて、このように私たちにたくさんのお話をしてくださったのだと、今になって改めて思います。また、卒業後のことです。私が海外に赴任していた際には、先生からエアメールで励ましのお手紙をいただいたこともありました。こうした心くばりには、私だけでなくおそらく他の多くの方々にも向けられていたのだろうと想像します。

先生はたくさんの方々の趣味をお持ちでしたが、その中でもカメラに対する情熱は特別でした。卒業式の際には、首からカメラを下げて学生たちの写真を撮っておられる姿を覚えています。私自身も当時撮っていた写真や写真を今でも保管しています。また、先生が撮りためられた四季折々の自然とともに映る校舎の写真展を、学内で開催されたこともありました。学生だった当時の私の目には、先生は忙しい教育や研究の傍ら、大学教員としての生活を生き生きと楽しんでいるように映っていました。

先生は奈良のご自宅から近鉄特急で通勤されており、私が2014年に三重大学に赴任した後も、退職後に非常勤で講義のために来学されていた先生と駅や大学でバツタリお会いする機会が何度かありました。そのような折には、いつも先生の方から「おー、竹林くん」と声をかけてくださり、最近気になっていたことなどを話してくださいました。また、ある時には私が津駅から近鉄特急に乗車した際、通路を挟んで隣の席に先生が偶然いらつしやり、奈良にある乗り換えの大和八木駅までずっとお話ししたこともありました。

伊藤信孝先生を

思ぶ

王 秀 崙

伊藤信孝先生は令和7年1月2日にお亡くなりになりました。享年82歳でした。とても元気で教育研究にご活躍中の伊藤信孝先生でしたが、タイ滞在中、階段の踏み外しによって転倒し頭部を強く打たれ、意識不明の状態がタイに約1ヶ月入院されておられました。その後、意識回復せずに帰国され入院し続けておられました。その後、意識が少し回復しましたが、食事ができない状態が長く続き、最終的に多臓器機能不全でお亡くなりになりました。

伊藤信孝先生は昭和17年三重県亀山市でお生まれになり、昭和40年3月三重大学農学部総合農学科卒業後、京都大学大学院農学研究科農工専攻に進学し、昭和45年3月同専攻博士課程を単位取得退学され、同年4月より三重大学農学部助手として採用され、昭和54年11月同助教に昇任、昭和59年12月同教授に昇任されました。昭和62年10月同大学生物資源学部に配置換え、平成18年3月ご定年によりご退職されました。退職後、タイ・チェンマイ大学およびメジョー大学で教鞭をとられ、国際舞台においてその才能を発揮しておられました。

伊藤信孝先生は三重大学において36年の長きにわたり、教育研究に精励され、深い学識と教育者としての豊かな経験をもって幾多の有為な人材の養成と後進の指導にあたり、共に、大学院博士後期課程専攻主任

をはじめ、コース主任、学術・国際交流対応委員長、附属教育施設運営協議会委員、留学生委員会委員、三重大学留学生センター長等を歴任されて、大学及び学部の管理運営にご尽力されました。

研究面においては、農業機械の車輪と土との相互作用の研究に注力され、駆動輪が滑りを伴うときの沈下量との関係を明らかにされました。これを基にしてトラクタの滑り率・負荷制御に応用し、1981年には農業機械学会(現農業食料工学会)学術賞を受賞されました。また、車輪のみならず、履帯と土との関係解明にも臨み、旋回時の抵抗低減のための新たな提案であるピボット式旋回方式を開発されました。この履帯を使用した車両の1つであるコンバインの刈り取り方式に対しても、新たな方式である上部旋回式コンバインを開発され、加えて、刈り取りと同時に脱稈まで行う糶摺りコンバインも開発されました。晩年には、「米が地球を救う」というスローガンを掲げ、米をキーマンとして、人口、食料、環境、エネルギーの四つの課題を解決する「グローバルトラレンマ」を提案して、多くの講演が行われました。

伊藤信孝先生は国際交流に多大の貢献をされました。2度にわたる三重大学留学生センター長、生物資源学部国際交流委員長、インターンシップ導入委員等を歴任され、大学の管理運営のみならず、多くの留学生のご指導や国際シンポジウムの開催等を通して、特に国際交流分野においても多大な貢献をされました。先生は、1994年、三重大学、タイのチェンマイ大学、中国の江蘇大学を中心に「Tri-U International

Joint Seminar & Symposium」(略称Tri-U)

を発起され、第1回国際大会を三重大学で主催されました。人口、食料、環境、エネルギーをテーマとし、国内外の多くの大学の研究者や学生が参加し、共通の課題について議論を交わしました。[ここは、ホスト大学が輪番で主催し、毎年開催されています。2024年江蘇大学で第30回記念大会が開催され、伊藤信孝先生の、長年にわたるTri-Uへの多大なご貢献をたたえるために功績賞が授与されました。現在[ここ]のホスト校は、三重大学、チェンマイ大学、江蘇大学、ボゴール農科大学(インドネシア)、広西大学(中国)、メージョー大学(タイ)の6大学に増えました。伊藤信孝先生が直接ご指導された留学生やこの[ここ]に参加したことのある学生は、その後、それぞれの国の大学や研究機関で活躍しています。また、国際協力事業団(JICA)を通じて、タイ、エジプト、フィジー、トルコ、インドネシア等の多くの国際プロジェクトに参加され、功績を挙げられました。これらによりフィリピン・レイテ州立大学、タイ・カセサート大学、インドネシア・ボゴール農科大学より感謝状を授与されました。

伊藤信孝先生は物作りやオフロード車両が大好きで、研究用実験装置や荷物棚等を自ら金工室に入って様々な工作機械を駆使して作っておられました。農家でもありませんので、ご実家に農業機械をほぼ全て揃えておられるほか、工作機械やパワーショベルまでお持ちでした。私たちが学生の時代、よく先生のご自宅に招待されました。まず、水田、畑および車庫を案内され、建設機械や農業機械の操縦を楽しませていただいで

から御馳走をふるまっていたきました。先生は研究教育面においてかなり厳しい先生でしたが、学生たちをとてても可愛がってくださいました。ひと昔前の良き時代には、研究論文の打ち上げなどに研究室ではよく酒宴を催したりしていました。ほとんど伊藤先生のおごりでした、まことに人情味あふれる先生でもありました。

以上のように、伊藤信孝先生は教育者として、また研究者として長年にわたり、三重大学の発展に寄与されるとともに、農業食料工学会(旧農業機械学会)など関係学会の発展に多大の貢献をされ、特に国際交流分野において国際舞台で活躍する研究者・教育者を数多く育てられました。その業績は誠に顕著なものがあります。まだまだこれから国際舞台でご活躍されると期待されておりましたが、不慮のアクシデントによりご逝去され、大変残念に思います。伊藤信孝先生のご冥福を心からお祈りいたします。



近況ひとり言

山下 光 司

2022年3月に退職してから5年目に入りました。

最近、地域のボランティアや稲作を中心

に生活をしています。5月は田植えの時期で、準備作業として草刈りや田起こし、イノシシやモグラ・オケラなどの生き物でふかふかになった畔の手直し、土移動などいい汗をかいています。家の前が山なので、夜は庭にシカやイノシシ、昼間は柿を食べるにアナグマやタヌキが現れ、屋根にはアライグマがハクビシンの糞が残されています。毎日、自分も生き物であることを実感する日々です。退職してからは自身の時間を取り戻したようで、本当に自由になりました。お陰様で気持ち的にも体調面でも元気に過ごさせていただいています。

そんな中、最近のAIというものについて、様々なネット情報に触れて徒然思うことをお話ししてみたいと思います。今、AIの関連では、本当に社会の在り様が大きく変化する時代を迎えていると感じます。AIを上手に使う仕事で仕事の能率を上げることや、学び方、教育のあり様も大きく変わっていくでしょう。AIは様々な人間の仕事を代行できる便利なツールであるばかりではなく、人の能力を凌駕するような状況も間近になってきていると言われています。

「生身の人間は仕事をする必要がなくなる」という説や、「AIが自意識を持ち、超知能を獲得してロボットの身体を得ることで、人工生命体として自律的に進化を始めるのではないか」、そして「宇宙へ本格的に進出していく本命となるのでは」、一方で「人類の生存を脅かすのではないか」といったことまで囁かれています。まるでSFの世界がすぐそこに訪れようとしているかのようです。ただ、お陰様で私自身は、基本的に現役時代のような義務的な仕事をしなく

てもいい状況になっています。これはある意味、AIがほとんどの必要な仕事をしてくれて「人が働かなくてもいい世界」を、

私たち年金生活者が一歩先んじて生きているとも言えなくはありません。他にも、資産家になり生活に困らない方々も自由な生活を謳歌していますから、ある意味でAI時代を先取りしているのだと思います。「何もすることがなくなつて生きる意味を失う」とか「ボケてしまう」といった心配は、ほとんどないと思います。多くの人は自分の時間をたくさん得て、より生き生きと生活できるようにするはず。しかし一方で、AIとの対話を過度に求め、理想の人格を投影して心を捉えられてしまう人がいることや、過度に依存することで人としての思考力や想像力を失っていく恐れがあるとの報道もあります。超知能を獲得したAIに人が制御されることの無いよう、正しく人のためになるようにAIを制御し役立ててほしいと願っています。

結局のところ、私自身は上手にAIの便利などところを「つまみ食い」的に利用できればいいなと思っています。やはり、過度なAIへの依存は人類にとって危険性があるように思うからです。これからの若い世代の方々には人類の未来を託することになりますので、どうぞよろしく願います。体の元気なうちは、天気の良い日には外に出て野良仕事をし、自然の中で生活を過ごせばありがたいと思っています。

退職後

石川 知明

1998年(平成10年)4月に三重大学に採用されて、2024年(令和6年)3月に定年退職するまでの26年間お世話になりました。私事ながら、毎日京都の自宅から大学までの片道約100km(自動車で片道2時間と少し)の通勤をしてきました。そのため、退職後は自由な時間を持ちながら興味深くできる仕事はないのかと就職情報を見てみました。いろいろ探していると中学校や高校の講師の求人が目にとまりました。そこで、試しに講師の登録をしたところ、2024年(令和6年)4月から京都市立中学校の理科の非常勤講師として採用していただき、現在3年目を迎えています。

私が中学生だったのは半世紀ほど前のことです。中学校の状況もずいぶん変わったなと実感しています。授業では、生徒一人一人がタブレット端末を持っていて、デジタル教科書が利用でき、内容に応じた情報や実験動画を見ることができ、動画の効果は絶大で言葉で説明するよりもはるかに内容が伝わります。また、レポートの提出や課題提出もネットを利用して、生徒ごとに課題の提出日時や取り組んだ学習時間が分かるようになっていました。さらに、テストの採点も答案をPDFで読み込んでソフトで採点するようになっていました。答案の○×だけを記入すれば、各生徒の得点やクラスの平均点などが自動で計算されます。手間やミスが大幅に減つ

て教員の負担も軽くなつてきていると思います。学校生活のサポートについても、保護者との連絡はプリント類に加えてネットも活用されています。欠席や遅刻の連絡はネットを利用して行われます。連絡がないのに生徒が登校していない場合は保護者に電話で連絡を取って状況を確認しています。また、保護者からの意見や要望に対しても教員がきめ細かく対応され、手厚いサポートがされています。これだけの環境であれば、私の中学校生活も違ったものになつていたのでは、と思つてしまいます。

一方、学ぶ内容がどんどん増えていっているのに授業時間が少ないのではないかと感じます。週あたりの授業時間が決まっているうえに、いろいろな活動や行事のために授業時間が削られていきます。限られた授業時間数で決められたカリキュラムを終了しないといけないので、どうしても教員が説明する授業内容が主体になっていくように感じます。実験などを通して問題解決をしたり、疑問点を見つけ出したりしていく教育が必要だと思うのですが、なかなかそんな余裕はありません。理科の非常勤講師になった理由のひとつに、理科嫌いの生徒を少しでも減らしたいということがありました。自分自身の体力を含めて、いろいろな状況の中ではありますが、私としてはもう少し非常勤講師を続けて、理科に興味を持ってくれる生徒を一人でも多く育てていければいいなと思っています。退職後の状況について、とりとめのない文章を書かせていただきました。最後になりましたが、皆様のますますのご健康とご健勝をお祈りいたします。

近況報告

陳山 鵬

平成15年に九州工業大学情報工学部機械システム工学科より転任し、令和6年の定年退職までの21年間 三重大学(生物資源学研究所共生環境学専攻環境情報システム工学講座)に勤務してまいりました。定年退職後も、複数企業との共同研究や日本学術振興会科学研究費助成事業の課題を継続するため、特任教員(研究担当)として引き続き勤務させていただいております。

これまで、生物資源学部・研究科をはじめ、諸先生方、事務の皆様ならびに関係各位には長年にわたり大変お世話になり、心より感謝いたしております。

なお、私は昭和62年に、三重大学大学院農学研究科農業機械工学専攻(現・生物資源学研究科共生環境学専攻環境情報システム工学講座)修士課程を修了後、九州大学大学院農学研究科農業工学専攻博士課程に進学いたしました。

研究面においては、長年にわたり一貫して、工業・農業生産設備の安全・安心を支える保全・診断技術に関する基礎・応用研究に取り組んできました。具体的には、設備診断技術を構成する要素技術(計測技術、信号処理技術、特徴抽出技術、簡易診断技術、精密診断技術および余寿命予測技術)ならびに設備状態監視・診断システムの構築技術の確立を進めてまいりました。現在も、3社の企業と連携し、化学、製鉄およびものづくり産業における生産設備の状態管理・診断技術について共同検討を行つて

おります。

また、知能ロボット分野においては、自律走行や触覚情報に基づく把持制御に関する基礎研究にも取り組んできました。近年では、日本学術振興会科学研究費助成事業の課題として「インダストリー 4.0・IoT 時代に対応したスマート設備点検・診断ロボットに関する研究」を行っております。

2024 年 4 月 23 日の三重大学トピックに掲載された「米国スタンフォード大学および Elsevier 社による世界トップ 2% 科学者リストに本学教員が選出されました」という記事において、私は「生涯 (career-long)」区分の対象者として、「Artificial Intelligence & Image Processing」分野に選出されました。当初は自身の専門分野との関連にやや意外性を感じましたが、これまで取り組んできた知的設備診断や知能ロボットの研究において、同分野の手法を幅広く応用してきた結果であると理解しました。

学協会活動面においては、(一社) 日本設備管理学会会長 (令和 6 年度) を拝命しており、学会改革および活動の活性化に尽力しています。高度な設備管理技術は、Society 5.0 (次世代社会) や SDGs (持続可能な開発目標) の実現において極めて重要かつ不可欠な要素です。日本設備管理学会は 1989 年の設立以来 37 年にわたり、設備管理技術に関する経営、設計、製造、保全、環境、福祉など幅広い分野において、学術および技術の振興・発展に大きく寄与してきました。

また、(公社) 日本プラントメンテナンス協会の T P M 優秀賞・商品賞の審査員

を務めており、毎年、国内外の複数企業およびメンテナンス関連製品の審査に携わっています。T P M (Total Productive Maintenance : 全員参加型生産保全) は、設備効率の最大化とロス削減を目的に、現場のオペレーターから管理部門まで全員が参画して保全活動を推進する経営手法です。故障・不良・災害の未然防止を図り、生産性向上と安全・品質の確保、さらには企業体質の強化に寄与します。

さらに、農業食料工学会、日本機械学会、計測自動制御学会にも所属し、日本機械学会評価・診断シンポジウム組織員、日本設備管理学会誌編集委員、日本設備管理学会最新設備診断技術の実用性に関する研究会顧問も務めています。

趣味面においては、中学生の頃から卓球を始め、継続的に競技に取り組んでいました。九州工業大学在職中には教職員卓球大会において毎回優勝を果たすなど、研鑽を積んできました。その後、三重大学へ転勤してからは、講座の先生方々のお誘いを受けてテニスを始め、現在では主要な趣味となっています。現在は、津シニアテニス連盟、三重県シニアテニス協会、日本シニアテニス連盟などの活動に参加し、各種競技大会にも可能なかぎり出場しています。限られた時間の中ではありますが、競技力の向上とより良い成績を目指して努力しています。今後も健康維持を図るとともに、テニス技能のさらなる向上に努め、長く競技を楽しむながら充実したテニス活動を続けていきたいと考えています。

末筆ながら、同窓会の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。今後、同窓会

などで皆様とお会いし、気軽に近況を語り合える機会を楽しみにしております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

近況報告

大野 研

■勤務先と近況

退職して早くも 2 年あまりが経ちました。現在は、名古屋の(株)三祐コンサルティングに技術顧問として勤めさせていただいています。卒業生が多く、大学の後輩も何人在籍している会社です。非常に自由闊達な社風で、現役生の皆さんには就職先の候補としてぜひ検討してほしいと思っています。今年度も卒業生が 1 名就職しました。

■三重大学の担当 (非常勤講師)

会社が「非常勤講師や各種行政の委員もどんどんやっつていい」と背中を押してくれのおかげで、昨年度は三重大学で非常勤講師として、学部専門科目を 2 つ、大学院科目を 1 つの半分、共通教育科目を 3 つ担当しました。今年度は、同窓会の会報でも報告されているとおり、2024 年度入学生からの学部改組に伴ってカリキュラムが変更された影響で、僕が担当していた専門科目がカリキュラムから消えてしまい、学部専門科目の担当はなくなりました。大学院科目は変わらず 1 つの半分の担当する予定です。一方で共通教育科目は 2 つ増え、合計 5 つになりました。ですので、相変わらず少しは三重大学の構内をうろろしています。居場所がないので、学内で見かけた

ら、お茶でもご一緒していただけるとありがたいです。

■各種行政の委員について

各種行政の委員については、大学を定年で退職するタイミングで任期を迎えたものもあり、また民間の会社員になったこともあって、いったん数がかなり減りました。

ただ、利益相反が生じない範囲であれば委員を務めても差し支えない、という点を僕自身も役所の方々も改めて理解し始め、最近再び委員の数が増えつつあります。現役の先生方は本当に忙しくて気の毒ですの、僕で務まるものがあり、かつ利益相反が生じない委員であれば、できるだけ引き受けたいと思っています。もともと、名古屋在住ではありますが。

■名古屋への転居

そうでした。近況としては、名古屋に引っ越しました。退職金をすべてつぎ込み、名古屋の実家の跡地に家を建てました。すでに建築費高騰が始まっていた時期でしたが、小さい家をなんとかぎりぎり建てることができました。もう少し時期が遅れていたら、建たなかったかもしれません。退職後しばらくは、津在住の卒業生の皆さんに遊んでもらっていましたが、名古屋に移ったことで、退職して時間ができた高校の同級生とも会うようになりました。さらに名古屋には大学の後輩たちも就職しており、彼らとも少し遊ぶようになって、なんだか世界が広がった感じがしています。

■大学教育について考えたこと

大学の後輩に「最近の大学教育はひどい」と嘆いていたら、「僕たちが 50 年前に受けていた大学教育だって、そんなに褒められ

たものではなかったでしょう」とたしなめられました。確かに、学生時代の記憶はすっかり抜け落ちていました。振り返れば、大学教員になってからも「大学教育はどうあるべきか」を真剣に考えることはほとんどありませんでした。ところが教員生活の晩年、教養教育（共通教育）所属になり、大学教育のグローバル化が進むなかで、ようやく「大学教育そのもの」を考えるようになりました。

その過程で、大学教育について初めて知ることがたくさんありました。たとえば、僕が当然のものと思っていた「単位制システム」は米国で発展したもので、中世以来の伝統を持つ欧州の大学では採用されていないケースも多かったこと、そしてグローバル化に伴い、欧州でもようやく20数年前から採用が進んできたことなどです。また、「単位」の価値を世界で揃える必要があるため、「1単位」の価値が定義されていることも知りました。

■単位制度と学修時間（90時間）の話

通常の講義科目はご存じのとおり「2単位」です。国際標準では、その科目で2単位を認定するために90時間の学修時間（※学習時間ではなく学修時間）が必要とされます。週1コマ（2時間）の授業を15週行くと、授業時間として30時間が確保されます。残り60時間は授業時間外の学修で補う設計です。三重大学の授業シラバスを見ると、すべての科目に事前・事後学修の時間が記載されており、多くの場合、合計4時間になるように書かれています。これを15週続ければ60時間になり、授業内30時間と合わせて90時間となります。こうした基準

に基づくことで、世界中の大学との単位互換が可能になります。

このように外形的には、大学教育の質保証（90時間も勉強すれば、それなりの学修成果が期待できます）とグローバル化が整いつつありますが、実質はなかなか伴っていません。だって、1日に4コマ授業を取れば、学修時間だけで24時間埋まってしまう。

■改善に向けた考え（教養教育・専門教育）

こうしたことを知り、さらに近年の教養教育（共通教育）軽視の傾向も相まって、大学教育の改善点をあれこれ考えるようになりました。たとえば東北大学では、主に名誉教授の先生方で構成される組織（東北大学教養教育院）が教養教育の企画・運営を担っています。忙しい現役の先生方に比べて、名誉教授の先生方のほうが腰を据えて大学教育に取り組めるはずです。これは三重大学でも、すぐにでも検討してほしいと思っています。確実に三重大生の質が向上するはずで。

同様の仕組みを専門教育でも考えられないか、とも思います。ただし専門教育の場合、古い先生の存在が教育面では効果を持つとしても、現役の先生方が自由闊達に進めるべき研究面に悪影響を与える可能性もあります。仮に導入を検討するなら、慎重な議論が必要でしょう。

■最後に

以上、思いつくままに近況をご報告しました。現在も卒業生の皆さんには、会社や委員会、そして遊び友達としてお世話になっていきます。これまでのことにも大変感謝しておりますが、今後も嫌がらずにお付

き合いいただけることを期待して筆を置きます。

ありがとう
ごぞいしました。

神原 淳

三翠同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。退職して2年となりますが、元気に過ごしております。さて、同窓会の皆様には、研究科附属紀伊黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター附帯施設水産実験所の英虞湾座賀島から鳥羽市小浜地区への移転に際し、並々ならぬご支援をいただきました。厚く御礼申し上げますとともに、よい機会ですので、水産実験所移転の経緯について、作業に携わった一人としてご説明させていただきます。

事の始まりは、忘れもしない平成23年3月11日に起こった東日本大震災でした。東北太平洋沿岸地域の惨状が明らかになるにつれ、水産実験所長経験者でもあった私には、予てから懸念されている南海トラフ巨大地震が実際に起こった場合の水産実験所のこと、つまり、水産実験所が所在する座賀島は小さな離島で標高も11m程度しか無く、しかし津波は地震発生後数分で到達する可能性があること、一方、そのような環境に学生や教職員が終日常駐しており、また、多くの学生が参加する宿泊実習もある

こと等を考えると、水産実験所では地震や津波に対する備えはしているものの、離島に所在するが故に大変なことになるとの心配が日々つのりました。

その後、私はフィールドサイエンスセンター長を拝命し、その立場で内田淳正学長（当時）に学生や教職員の命を守るために水産実験所の陸続きの場所への移転が是非とも必要であることをお願いしてみました。内田学長は、私の顔をじっと見ながら、「あなたの話はわかるし、気持ちもよくわかる。しかし、あなたは水産実験所をどうするつもりなのか。単に危険だから移すという話ではだめだ。斬新な水産実験所の将来構想と併せて持つてこないと、あなたの話は聞けん。」とのご助言をいただきました。その後、志摩市と日本財団が計画する離島振興のプロジェクトに水産実験所構想を乗せようと準備委員会に参加したりしました。また、平成28年度より三重大は地域に貢献する地域圏大学として大きく舵を切りましたが、その目玉として地域拠点サテライト構想が立ちあがりました。このサテライト構想に新水産実験所を乗せることも試みましたが、いずれも実現は難しい状況でした。そんな中、梅川逸人研究科長（当時）が、水産実験所が直面している津波等の危険性を憂い、予てより進めていた新水産実験所をコアとした地域の水産海洋系教育研究機関連携構想とともに、水産実験所の移転について駒田美弘学長（当時）や大学執行部の方々に話をしていたいただきました。また、何度も本省に出向いていたき、移転も含めた構想について担当事務官に説明を行っていたきました。その結果、

駒田学長から三重大大学の予算立てで水産実験所移転の話を進めてよいとのご了解にこぎ着けることができました。一方、ゴーサインは出たものの、限られた予算の中で水産実験所の教育研究、学生宿泊等の必要機能を満たす必要があるため、当初は廃校等の活用を考え、東紀州、志摩、鳥羽、鈴鹿地域などの施設を見て回りましたが、条件に合う候補は見つからず、頭を抱える日々が続いていました。その頃、研究科の産学連携コーディネーターをしていたいた前川行幸先生（現同窓会会長）に鳥羽水産研究所が坂手島から鳥羽市小浜地区に移転するらしいとの情報を持ってきていただきました。鳥羽水産研究所の移転予定地にはまだ空き地があること、鳥羽水産研究所と新水産実験所が隣接すれば教育研究における様々な連携を効率的に行う事ができ双方にメリットがあること、さらに、小浜地区には高台にある旧小浜小学校が地区の公民館や津波避難施設として使用されており、ここを学生の宿泊施設として利用できる可能性があることなど、前川行幸先生と話をすることで水産実験所移転が現実味を帯び、希望が大きく膨らみました。さらに、前川行幸先生のコーディネートにより、中村欣一郎鳥羽市長（当時）、鳥羽市農水商工課、鳥羽市教育委員会、鳥羽磯部漁業協同組合の皆様のご説明も迅速に進めることができました。一方、予算面では、まだまだ厳しいところがありました。そこで、奥村克純研究科長（当時）と本省に出向き、移転と地域連携構想を説明し、経費の補助をお願いしたところ、担当事務官からは、

「経費の補助は難しい。しかし、この構想なら水産実験所に新規教員を付けることはできるかもしれないので、構想をシェイプアップして持っていきたい。」との指示をいただきました。本望ではないにせよ、教員の純増は定員削減が進む中であり得ないようなことなので、シェイプアップした構想を提出したところ、結果的にプラス2名の教員を水産実験所に配置する事ができました。一方、経費不足については、なお頭を抱えたままでしたが、これも前川行幸先生のご尽力により同窓会に設備経費の一部を支援していただけることになり、最終的に新水産実験所としての必須機能が準備でき、スタートにこぎ着ける事ができました。以上が水産実験所移転の経緯です。発案から約10年の年月が過ぎてしまいましたが、多くの学内外の方々のご理解とご支援をいただけたからこそ移転が実現できたと思っています。特に、同窓会会長の前川行幸先生はじめ同窓会の皆様には、この場をお借りして心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

三回の退職

吉岡 基

六十五歳。この年齢は今の三重大学教員の定年退職の年齢ですが、私は、少し異例にも、三回の退職の辞令をいただきました。その最後が、令和七（二〇二五）年三月三十一日付けの三重大学教授としての退職でした。その年齢は、六十六歳。通常より一

年長く三重大学でお世話になりました。

今から三十二年前、当時、柏木正章教授が魚類増殖学教育研究分野を率いておられたとき、日本学術振興会特別研究員の任期を終えた私を助教授として採用いただきました。その後、柏木教授とともに研究室運営に十二年半ほど関わらせていただいたあと、教授に昇進させていただき、田中晶善研究科長のときに副研究科長を拝命、以後研究科長、理事（研究・情報担当）・副学長、副学長（研究担当）、評議員、生物圏生命科学専攻長、海洋生物資源学科長、副学長（研究担当）、理事（研究・情報担当）、副学長、それに加えて理事と理事の間に後述の附属施設長も務めさせていただきました。教員生活のうちの半分にあたる十六年を管理運営にも費やすことになり、教育・研究者としての時間を前半に、どちらかというと管理運営に携わる者としての時間を後半に過ごしたと言えます。大学役員として、内田淳正元学長と現在の伊藤正明学長の下で、理事を二回務めさせていただきました。ことから、中間二回の退職を挟むことになりました。定年までの日数をカウントダウンしていた、六十五歳になる年度に二回目の理事を仰せつかったことで、定年一年前に生物資源学部・研究科を離れることになり、最終的に理事の任期満了をもって、真の意味での退職を迎えることになりました。三重大学での教員生活三十一年間のうちの二十七年間、私は「魚類増殖学」教育研究分野の教員でありながら、魚類の繁殖生理学的指導もしつつ、海生哺乳類、とくに鯨類、すなわち、クジラやイルカの研究と教育をしていました。鯨類は、今でも学生

たちには人気の動物であり、年度による波はありましたが、在職中、途切れることなく、学部学生、大学院学生を全国から少なからず受け入れ、教育と研究に取り組むことができました。また、平成二十八年十二月には、当時のイルカ漁業を取り巻く国際情勢もあり、第三期中期目標・中期計画期間における三重大学の機能強化構想の一環として、研究科内に附属鯨類研究センターを設置し、特定の動物を対象とした研究（当時は、とくに繁殖研究）を推進する組織をつくることができました。センターは、令和六年四月から、三重大学研究基盤推進機構下の一センターとなったことから、所管が研究科から全学に移りましたが、今年はセンター設置から早いもので十年になります。さらにその後、令和五年十月には、魚類増殖学教育研究分野から、鯨類学教育研究分野を分離独立させ、周年、小型のイルカであるスナメリが生息する伊勢湾に面した立地にある学部・研究科に、鯨類専門の研究室をつくることができました。私はこの研究室の教員として在籍することはありませんでしたが、学内外のニーズも勘案して、新しい研究室をつくる事ができたことは、自分にとっては、学術論文として研究成果を残すこと以上に、三重大学に勤務した意義があったと捉えています。

研究面では、学生時代からのひとつの目標であった、イルカの人工授精に研究の開始から約二十年かかって成功しました。その直後はあまり注目されませんでした。水族館への野生からのイルカの導入が困難になったこともあり、現在は、その技術が国内の水族館でふつうの技術になりつつあ

近況報告

古丸 明

ることを嬉しく思っています。また、鯨類に限らず、各地の水族館に卒業・修了生たちが少なからず就職して活躍しているだけではなく、研究室の現役の学生たちと一緒に水族館との共同研究ができるつながりができたこともとても嬉しく思っているところです。

大学教員としての退職後は生物資源学部・研究科を離れ、前述の鯨類研究センターで非常勤研究員としてお世話になっていきます。この原稿をお読みいただくときには、まだ学内にいるかと思いますが、その後は、長くお世話になった三重の地を離れる予定にしています。私が赴任したときには、未完であった現在の七階建の口の字形の生物資源学部校舎は、今年から、長い年月をかけての改修工事が始まりました。三重大学に着任したときの辞令は、現在の総合研究棟Ⅱがある場所にあった旧校舎の学部長室でいただいたので、生物資源学部校舎の歴史とともに、自分が三重大学で教員生活を送れたことを思うと、別の意味でも感慨深いものがあります。時代の社会的ニーズや学生数にに応じて、教育研究分野・学科・学部・専攻が変わらぬまま存続していくことはもはや難しい時代になっています。しかし、人が生きていくために「食べる」という行為がある限り、その「食」の学問を扱う生物資源学部、ひいては前身の農学部や水産学部の流れを汲んだ教育と研究、そしてそれらの根底にある理念が今後も長く引き継がれ、発展していくことを心から願い、退職の御挨拶と在職中お世話になった多くの皆様への感謝を申し上げ、近況報告とさせていただきます。

令和6年3月に退職して2年以上が過ぎました。会員の皆様にはご清栄のことと拝察いたします。退職すると、timeがぐっと減って自由な時間が増えることになりました。絶えず、いろんなメ切、いろんな用事に追われていた生活から、ふっと身が浮遊して少し足元が頼りないような不思議な感じがしたのを覚えております。今振り返ってみると、大学の教員の活動の多くは学生、院生の努力に支えられていたことがよくわかります。退職するといろんなことを1人ですることになり、効率が悪く、前に進まず、ただ日が過ぎていくような感じがします。退職した自分が今、何をしているのか、何を考えているのか、ということを書いてみたいと思います。

「読む」

現役の頃と比べて本を読む時間が増えました。歴史に興味があつたので本を漁って読みました。その中で特に印象に残った本として、「日本陸軍(中公文庫)」「JFK ホワイトハウスの決断(世界文化社)」「マクナマラ回顧録(共同通信社)」などがあげられます。前者は日本がどのように戦争に向かって行ったのかを陸軍の立場から描いています。エリート軍人たちの考え方の根幹にあるのは、いかに武勲をあげて自分たちのステータスを得るか、というところにつきまします。武勲を上げるためには、兵を動かし、領土を拡張するなり、賠償金を得るなりしないといけないのです。平和な世

の中では勲章も爵位も得られないわけです。日清、日露の戦を経て無謀な戦争に突入していくことになります。226事件等が契機になり、次第に物言いにくい社会となっていくきます。根底にあつたのはテロに対する恐怖、それは有名な海軍大将山本五十六も、いつか凶弾にたおれるかもしれない、という思いがあつて遺書を認めていたそうです。開戦時の首相は東条英機。もちろんシビリアンでなく陸軍大將です。東条であれば陸軍を抑えられる、という重鎮たちの期待はすぐに幻想となります。陸軍としては、同胞の血で獲得した満蒙の權益を安易に手放すわけにはいかない、それが大陸からの撤兵という選択肢を無くしてしまい、やがて真珠湾攻撃へと進んでいきます。

キューバ危機の際には、軍人が軍事手段以外の選択肢はないとJFKケネディ大統領に迫り、大統領が必死でそうさせまいとして外交手段を尽くし、かつ苦悩する、緊迫の場面が描き出されています。ケネディは会議のやりとりの多くを音声として残していました。大統領が会議を中座した際にもテープが回っていて軍の高官たちはそれを知らずに「奴をうまく追いかんだな」「クソツタレめが、やつがぐずぐずを望むなら」「奴のせいで物事が前に進まない」と散々な悪口雑言がそのまま残っているそうです。

マクナマラ回顧録は、ベトナム戦争の泥沼にどう引き摺り込まれていったかを多くの資料により、時系列に沿って精緻に描き出していきます。マクナマラはフォードの経営者でしたが、JFKにより国防大臣に

指名されます。この本では、次のジョンソン政権におけるマクナマラの苦悩と悔恨が描き出されています。

軍人は、軍事行動で決着をつけようとし、それ以外の選択肢はない、と国防大臣に派兵をさらに迫る経緯はシビリアンコントロールのあり方について考えさせられました。仕組みがあつたとしてもそれがうまく機能するとは限らない、ということですが、それを扱う人次第ということは昨今の不安定な世界情勢を見ても明らかです。人間は過去の歴史に学んでいない、むしろ過ちを繰り返しているようではがゆい思いです。また、記録の扱い方という点でも考えさせられる2冊の本でした。

「歩く」

健康のため、できるだけ歩くようにしています。幸い、奈良が近いので、名所旧跡や古墳を訪ねたりしています。古い道は結構起伏があり、いい汗をかきます。先日もし山之辺の道を歩きましたが、崇神天皇陵、景行天皇陵とされる古墳は、お墓というよりも小山で全体の形を捉えることが難しいのです。よく1000年以上も残ったものだという感慨を覚えました。ただし、天皇陵とされるものは残されているものの、それ以外の多くは宅地化で姿を消したそうです。

3月末には花見に長谷寺に出かけました。引退すると土日以外の日に散歩のことで、混雑を避けることができます。これはシニアの特権です。ただ、店が休みだったりすることがあるので要注意です。長谷寺の舞台から桜を眺めて寿命が伸びるような気がしました。「インバウンドも少な

静かで花も綺麗でええですなあ」と茶屋で隣に座っていた上品な夫婦にふると、「どこの方でも桜見はったら嬉しいし、幸せにもなれるわなあ」という関西弁の柔らかいリプライが。うん、自分の心狭いのを反省「聴く」

今は若い方はspotifyとかネットでダウンロードした音源をスマホで聴いているでしょうから、レコードを聴く人はほとんどいないと思います。私らの若い頃にはLP(レコード)が全盛期で、昭和の終わり頃にCDが出現し、そのノイズの少なさに驚いたものです。ウォークマンという、カセットテープを歩きながら聞ける、という小型の再生装置ができた頃のことを思うと隔世の感があります。当時はレコードからテープに落したり、FMからテープに落として聞いていました。ノイズ、ダイナミックスレンジ、周波数の幅、いずれもCDの特性が優れているそうです。ですが、同じ音源で、CDとLPを比べて聴くと、リアリティ、音の密度感、温かみはCDよりレコードの方が血の通った音に聞こえます。昔の音楽喫茶がリニユアルしたというので出かけて、久しぶりにレコードの音をきいて、つい安いレコードプレーヤーを、買ってしまいました。そこが道楽の再開で、プレーヤーを自作したり、トーンアームという細長い装置を中古で探してきて付け替えたり、さらにトーンアームの先端の部分(針の振動を電気信号に変えるところ…カートリッジ)をより性能のいいものに、という沼に。レコードも新品は物によって1枚5,000円以上するので、ヤフオクで安く落として聴いています。ただしヤフオクで

手に入れたものは盤面に傷があったり、埃だらけ、カビだらけということが多いのです。レコードを洗ってカビを落として、というのも楽しみのうちか。ハズレレコードを引かないコツ、というの也会得しました。

と言った感じで過ごしていますが、今思っても、現役の時代が人生の華です。現役の時には隙間時間を使っているんなことをやっていたような気がします。その頃はいろんな点で効率が良かった。今は本がたくさん読めると言っても、目が悪くなっているのも、長時間は集中して読めないです。ロシア文学に至っては同じ登場人物でも場面によって呼び名が違っていたりするので、これは一体誰だったか?としばしば混乱するので敬遠。若い時は体力があるので、集中して濃い時間が過ごせます。ただ、気をつけて欲しいのはスマホ、ネットとの付き合い方です。時間を潰すには、情報のやりとり、調べ物をするには至極便利です。ただし、電車で見ていても、ほとんどの方がゲームとか動画で暇つぶししていますね。貴重な若い時間を蚕食されてしまうことになりかねない。余暇の過ごし方についての「戦略」もいるでしょうし、集中と思索のためにはスマホをある時間遠ざけると、ということもあった方が良くもしませせん。時間とエネルギーはあまり分散させてはいけないうちに思うこの頃です。皆様にはくれぐれも健康に留意され、ますますご活躍されるよう祈念して雑駁な文の筆を措きます。

近況報告

梅崎輝尚

令和7年3月に定年退職を迎えました。予定では最後の研究テーマである「オリジナル五色大豆の育成」を完了して研究に一区切りをつけるはずでしたが、近年の夏の酷暑、長期渇水およびミナミアカメムシの大発生により生産現場でのデータが足りないまま三重大学を離れることになりました。幸いなことに松阪市の権現前営農組合の大豆生産圃場の片隅で試験栽培を続けさせていただいております。

また、料理研究家の辰巳芳子氏が始められた大豆百粒運動を支える会では小・中学生の大豆研究や観察日記の激甘講評を、志摩市のきんこ芋生産農家育成事業「きんこ塾」の講師を引き続き担当しています。玉城町では前述の五色大豆と宇宙大豆(スペースシャトルで運ばれ国際宇宙ステーションきぼうに8カ月滞在した日本の大豆種子の子孫)を用いた地域活性化活動を、多気町ではサツマイモや大豆栽培を通して子どもの第3の居場所づくりを手伝い始めました。作物栽培を通して細々とではありますが、社会と繋がりが続けることが出来ています。

一方、学生時代に福岡藩黒田家の菩提寺である崇福寺の松川賢外老師から手ほどきを受けた座禅の縁で、堺市の海会寺住職安保紹隆老師が中祐一郎本学名誉教授と共に一身田のご実家で開催されていた座禅会に参加していましたが、在職中には同席した多くの方々に助けられ感謝しております。

同じく堺市の臨江寺住職磯部宗寛老師はご子息が実質的に後を引き継がれていることから、住職の不在となった三原市の蓮華寺の管理を引き受けられて月に1度通われているようです。時々、声がかかり同行してお寺の廊下の雑巾がけや境内の草刈りなどを手伝っております。テレビもネットも繋がらない環境に身を置くことで自分に向き合う貴重な時間ができます。ふたりの老師はいずれも松川賢外老師のお弟子さんです。先日、久しぶりに参加した座禅会で自らの煩惱の大きさを再確認されました。「人間死んだらお終い」。過去に捕らわれず、未来に不安を覚え、今ここ現在を一所懸命に生きるという心境にはまだまだ遠いようです。

三重大生活と近況

松村直人

令和7年3月、2025年という区切りの良い年で三重大学を定年退職して、早くも1年が経ちました。最後の3年間は学部長・研究科長を務め、特に最後の3ヶ月は、分刻みとはいませんが、寝込んでは大変と、気力で乗り切った印象です。最近声を掛けられましても、重荷を下ろし、足取りも軽い印象です、と言われます。

三重大学には、平成12(2000)年10月、同年4月に1学科から3学科の体制になって半年後に着任しました。久能均学部長から辞令をいただいたのですが、緊張していたのか、当時の事務長の前に進み、一礼し

たのを覚えています。農水省林野庁の森林総合研究所四国支所からの出向であったのですが、徳島で生まれ、学生生活は名古屋、ドイツ留学を経て、半年のつくば、10年あまりの高知生活の後、津に落ち着いた次第です。

当初は大学生活も戸惑いばかりで、講座会議とコース会議の違いも分からず、シラバスの書き方や教授法のレクチャーもなく、教職員や学生の皆様に大変ご迷惑をかけたがらのスタートであったと思います。

私の専門は森林科学(林学)、その中でも森林計画学という分野ですが、林業中心の学問から自然環境保全、生態系保全の側面が強くなり、生産林(経済林)と環境林(非経済林)のゾーニング、そのための合意形成、持続可能性のチェック(外部認証制度)などの議論が盛んだった時期です。それらを森林資源管理の理念とすると、それを支える技術として、森林資源情報の広域、かつ高精度な取得、人工林と天然林の確実な更新と再生を支える技術開発などが、当時爆発的に発展しつつあったGISやGPSをプラットフォームとして期待されていました。

三重大学には、豊かで広い演習林があり、また、社会連携活動としても、各市町や林業事業体、山林所有者の方々との交流もあり、研究フィールドとしても、大変得がたい経験をさせていただきました。特に長期の森林計画を立てるためには、管理の履歴の判明している成長データが有用です。間伐遅れで所有境界不明な人工林が増える中、農水省のプロジェクトや奈良・和歌山・三重の紀伊半島3県プロジェクトで、高精

度森林資源情報の活用と数値指標に則った森林整備指針を提案できたことも印象的な思い出です。

管理運営面では、学務、入試、国際交流、演習林長、フィールドサイエンス長、副研究科長、研究科長などの職務で、全学会議においても、生物資源学部との伝統と重みを痛感しました。特に三重高等農林以来の一連の100周年記念事業を無事に遂行できましたことはとてもうれしい思い出です。これも伊藤正明学長始め、多数の教職員、同窓生のご支援の賜です。あいにくコロナ禍の終期で、学部での記念式典にも多くの卒業生や関係者をお招きすることができなかつたのが心残りです。

現在は断捨離の日々ですが、研究活動も継続し、各種委員会や研修講師、調査の下請け仕事なども可能な限り受けております。名刺交換の機会も多いので、やはり名刺も必要と作成したのですが、公職などの引き受け仕事も数えてみたら、7、8あり、今後は少し終活の方向で考えねばと思ったところです。

ウクライナやイランでの戦争など、大変な時代になりましたが、世界で尊敬される日本として、新たな時代を築いてくれるチャレンジ精神旺盛な学生を今後も輩出する三重大であって欲しいと思います。100周年事業で記念植樹したクマノザクラやクロマツも元気に育っており、学部の将来を見守ってくれることでしょう。

退職の日を無事迎えることができましたのも、教職員の皆様、また、同窓生の皆様のおかげと存じます。厚く御礼申し上げますとともに、皆様方の益々のご健勝とご多

幸を願っております。

近況報告

刈田修一

二〇二五年三月末をもって定年退職となりました。学生時代の六年間と、三重大学遺伝子実験施設での助手として採用以来、生物資源学部資源循環学科、生物圏生命化学科に至るまでの三十四年間とで、四十年の長きにわたり、三重大学にお世話になりました。

国立一期校としての三重大学に入学したのは、一九七八年で、前年一九七七年には、サンガー先生による塩基配列の決定法が報告され、まさにバイオテクノロジーの黎明期というところでした。農学部農芸化学コースで、研究室として醗酵学研究室に入り、松嶋欽一先生、嶋田協先生の元、微生物や酵素を扱う研究をしたことが、この道に進むきっかけとなりました。修士課程では、赴任された栗冠和郎先生の元、遺伝子を扱う研究にも触れさせていただきました。その後兵庫県西宮にある大関酒造に就職しましたが、縁あって一九九一年に当時発足しました三重大学遺伝子実験施設に採用をいただきました。当時、中島邦夫先生、服部束穂先生、大久保武先生、伊藤宏雄先生とともに、遺伝子実験施設の立ち上げを行いました。私は放射線取扱主任者として、施設内の放射線エリアの設計を担当し、当時の監督官庁であった科学技術庁の担当官のやりとりなどを担当しております。

た。遺伝子実験施設の建物ができた後、放射線取扱主任者のほか、DNAシークエンサーや、プロテインシークエンサーの維持管理担当で、塩基配列、タンパク質配列の決定を得意にしております。この時期、出身研究室の嶋田先生、大宮邦雄先生、栗冠先生、木村哲哉先生とセララゼ遺伝子を研究し、糖質結合モジュールの研究で学位をいただきました。この間、文科省在外研究員として、フランスのパスツール研究所、海外研修制度で、カリフォルニア大学デビス校での海外での研究を経験いたしました。二〇〇〇年に、生物資源学部の改組に伴い新設されました資源循環学科物質循環学講座、生物循環機能学研究室に採用され、谷山鉄郎先生、後藤正和先生の指導をいただき、乳酸菌をはじめ、畜産分野の微生物や腸内細菌に視野を広げることができました。その後、研究室に近藤誠先生を迎えました。二〇〇九年からは、大学院だけ、大学院地域イノベーション学研究所に席を移しました。地域イノベーション学研究所では、地域の企業の方との接点も多く、経営的な視点から考えることを多く学びました。この時期に、大学院生でした二軒茶屋餅の鈴木社長が研究室で酵母の単離を行い、単離した酵母でできた「ヒメホワイト」というビールが、国際ビアカップで金賞を受賞しました。見かけたときは、ぜひ、飲んでいただければと思います。二〇一五年から生物資源学研究所に戻り、生命機能化学講座に食品発酵学研究室を作っていたのだき、のちに、梅川碧里先生を迎え、現在の体制となっています。二〇一五年から、高等教育創造開発センターで、教育について

議論する立場をいただきました。部門では、アクティブラーニングの普及に取り組み、二〇一七年から四年間は、教育担当の学長補佐として、教職課程の再課程認定、教学マネジメント体制の構築、新型コロナウイルス対応に取り組みました。二〇二一年から二年間、教学マネジメント担当の副学長として、三重大学の教学マネジメント体制について取り組むことができました。この仕事には、多くの先生方と事務方の皆様のご支援をいただいたもので、二〇二四年には、教育部門での三重大学賞をいただくことができました。

また、アイソトープ施設では二十六年間にわたり放射線取扱主任者としての管理業務を担当してきました。監督官庁も、科学技術庁から、文科省、原子力規制庁と変わりましたが、二〇二二年に、生物資源学部のアイソトープ施設を閉鎖することで業務を終えることができました。昭和三十年台からの膨大な被曝記録や健康診断記録を整理する中で、同期や当時の先生方の名前を見るにつけて懐かしい思いをいたしました。任期中、大きな被曝事故等もなく、安全に管理できたことは、多くの先生方と技術職員の皆さんと学生の協力のおかげです。久松先生の後を受ける形で、三重大学の酒造りに関わり、寒紅梅酒造さんの協力で、いなべの農業公園の梅を使った三重大学梅酒「紅翠」を市販することができました。ぜひ、三重大学のお酒ともども、大学のお土産等に使っていただき、味わっていただければ幸いです。

社会人の時代を含め、同窓生の皆様には大変お世話になりました。特に就職が厳し

い時には、先輩諸氏から声かけをいただき、卒業生に活躍の場を与えていただきました。また、同窓生の皆様からの相談から共同研究に至った例も数多くあり、大学の研究費の削減の中、研究室の活動の支えとなりました。同窓会学内代表幹事の折には、各構成同窓会の皆様に御支援をいただき、総会をはじめ多くの行事を開催できました。これら多くの同窓生の皆様からのご支援に、この場を借りて御礼申し上げます。

さて、定年後は、毎日が日曜日になるかと思っておりましたが、三重大学のほか、三つの私立大学で非常勤講師の仕事をいただき、また現役時代の共同研究を継続いただいたこともあって、ほぼ毎日のようにどこかの大学へ出かけることになり、現役時代とあまり変わらない生活をすごしております。非常勤講師をしている関係で、最新の論文や情報を検索することも多く、専門分野の論文を読みながら、分野の進展を楽しんでおります。

それでも、講義だけの日には、朝夕に余裕がありますので、プランターでの野菜作りと、若手選手の活躍がみれるプロ野球の二軍の試合のテレビ観戦が楽しみになっています。また、非常勤講師の仕事がない休暇期間には、日本各地の第三セクターの鉄道に乗り、鉄印なるものを集める旅を楽しんでいます。

最後に、同窓会の益々のご発展と、同窓生の皆様のご活躍、ご健勝をお祈りいたします。

三重大学での

35年間を

振り返って

掛田 克行

2026年3月に、本定年より2年早く、生物資源学研究科を退職しました。三重大学には、生物資源学部が発足して間もない、1991年4月に、助手として赴任しました。それまで、とくに三重県にも三重大学にも縁があったわけではないのですが、当時博士課程の指導教授であった、山縣弘忠先生が卒業した母校（高等農林）という縁もあって、植物育種学の研究室に迎えてもらえることになりました。当初はまだ生物資源校舎の半分（1期工事分）が完成したところで、昔の農学部校舎（現・総合研究棟）で教員生活を始めました。それから35年間と言えば、実際には相当な年数になります。が、実感としてはそんなに昔のこととは感じられず、今でも赴任当初のことは鮮明に覚えています。というのも、赴任後の研究テーマがそれまでとは大きく変わり、当時植物の分野でも急速に普及してきた分子生物学や組換えDNA技術を使った研究、とくに研究室先代教授の神山康夫先生とともに、自家不和合性遺伝子の研究を始めることになったからです。その後、イギリス留学を経て、1996年からは助教授として、遺伝学や育種学の講義も担当するようになりました。

大学教員として、教育・研究・管理運営・社会貢献の面から振り返ると、35年間

の前半はほぼ研究（学生指導面での教育はありますが）、後半教授になってからは4つの面でそれなりのバランスで活動してきたように思います。研究はここで終わりというのではないので、在職中にまとめきれなかった論文製作など、退職後も継続しています。教育については、その言葉にややアレルギー症状もあり、講義等々は打ち止めにしますが、卒業生の皆さんとは今後何らかの交流の機会が持てれば嬉しいと思っています。管理運営に関して、学部・研究科の発展に貢献できた部分は少ないですが、広報委員長を務めながら学部パンフレットを作ったり、学科・専攻長として、自分の部署に加え、他講座や他学科の皆さんとも交流を深められたことはよい思い出になっています。社会貢献活動はあまり活発ではありませんでしたが、参画した三重県のイチゴ新品種開発の共同プロジェクトが最初の種子繁殖型品種（よつぼし）の育成につながりました。

以上、三重大学での思い出を綴ってきましたが、時が経つのは本当に早いものです。これからは仕事を離れて自由な身で何ができるのか、いろいろと取り組んでみたいと思っています。生物資源学部・研究科の教職員や卒業生の皆さんには、お世話になりましたとしか言えることもありません。皆さまの今後のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

◎三翠会館改修工事等に伴う寄附のお願い

三翠同窓会 会長 前川 行幸

「三翠会館」は、三重高等農林学校の開校10周年記念事業として同窓会員の賛金により、建築されたもので、工事は昭和11年(1936年)1月28日に着工し、約9か月を要して同年9月24日に竣工し、同年11月1日開館されました。

建物は、木造洋風2階建一部平屋建て、集会室として1階洋室、2階和室が設けられ、面積は1階309㎡、2階192㎡、計501㎡で、集会、宿泊及び校史関係資料展示等に活用されてきました。

昭和47年(1972年)には、農学部創立50周年記念事業の一環として、集会室の西側に新たにベランダが設けられ、明治調で三翠園と調和がとれ、グラバー邸を思わせる景観になりました。

平成14年(2002年)2月14日には、簡潔な意匠による経済的で技術的にも容易な技術様式体系が用いられ、昭和戦前期に建築された地方の木造公共建築の特色をよく留めていることから、登録有形文化財に指定されました。

また、三重大学開学50周年記念事業の一環として、同会館の大改修工事が行われ、平成14年(2002年)

3月25日に竣工し、三重高等農林学校時代の唯一の既存建築物としてキャンパスに由緒ある風情を残し、現在は1階に応接室、展示室、三翠同窓会事務室、多目的ホール、2階には和室があり、校史関係資料展示、各種会議・イベント等に活用され、一般観覧も認めており高い評価をいただいています。

同会館は、昭和11年11月1日に開館されてから90年が経過し、経年劣化による老朽化が著しく、特に屋根、外壁の傷みが激しく、三重大学に対し改修について再三要望してきたところ、令和7年度に文化庁から約1,500万円の予算措置があり、三翠同窓会からは800万円及び三重大学振興基金等からも支援をいただき、改修工事について令和7年10月14日に着工し、令和8年3月18日に竣工しました。

また、三翠園の樹木等についても、経費面の問題により、今まで十分な手入れができなかったこともあり、庭園としての景観がかなり損なわれた状態でしたが、これについても令和8年度に剪定等の大規模な整備が行われます。

これらの改修工事及び整備に伴



(改修後の三翠会館)

う経費について、人件費等の上昇もあり、当初想定していた予算よりも大幅に超過し、同会館建築の経緯からも三翠同窓会として支援の必要性を強く感じています。

会員の皆様には、事情ご賢察の上、ご協力いただきたくよろしくお願いいたします。

手続方法としては、別添の「払込取扱票」(1口10,000円)により、最寄りのコンビニ又は郵便局において支払いをお願いいたします。

令和8・9年度

定年退職予定教員

令和8年度

資源循環学専攻

奥田 均

共生環境学専攻

立花 義裕

生物圏生命科学専攻

寺西 克倫

大井 淳史

令和9年度

資源循環学専攻

野中 章久

共生環境学専攻

伊藤 良栄

生物圏生命科学専攻

稲垣 穰

松田 浩一

木村 哲哉

同窓会 会員名簿



○令和10年11月発行予定

○予約限定販売

○1部5,000円(送料・税込)

会員名簿の購入等、名簿に関するお問い合わせは、名簿作成作業委託先(株)サルトまで

0120-975-816
(受付番号241117)

事務局からの連絡とお願い



一、「三翠同窓会員名簿」について、4年に一度の発刊について令和6年度総会において承認され、次回発刊は令和10年11月末の予定です。

名簿は最新かつ、正確であるべきで会員各位からの情報は欠かせません。また、個人情報保護法関係を忠実に厳守する必要があります。そのため、会員各位の了承を得て住所・勤務先・電話番号等を掲載したいと考えております。前回の名簿からの変更や記載内容に間違等がございましたらご案内済みの確認はがきにてご連絡いただきますようお願いいたします。

二、本年度は、2頁掲載「会告」のとおり「三翠同窓会総会」を開催いたします。

なお、総会の前に「三翠同窓会三重県支部会総会」が開催されます。当支部会は、三翠同窓会活動の基礎となる中核的な組織で、本会の中の6つの構成同窓会が連携して三翠同窓会を支えています。さらに、資源循環学、共生環境学、生物圏生命科学、生物圏生命化学及び海洋生物資源学の各学科を卒業された方々も三翠同窓会を支えていただきますのでよろしくお願いします。

編集後記



農学部と水産学部を統合して誕生した生物資源学部は「山の頂から海の底まで」を

研究対象としています。研究拠点として90年代に新設した校舎は、30余年が経った今、2025年からの8年計画で大規模な改修工事の真っ最中です。常時響く工事の音にも負けず、教職員と学生は知恵を出し合い研究活動に励んでいます。思い出深い校舎の外見の面影はそのままに、内面の教育設備と研究設備を刷新し最先端へと邁進する母校の未来にご期待ください。

なお、本会報の編集は、三翠同窓会編集委員として、勝崎裕隆（三翠同窓会学内代表理事）、長屋祐一（農学会）、坂井 勝（志登茂会）、板谷明美（林学会）、西尾昌洋（化学会）、山田二久次（勢水会）、呉 婷婷（農機会）、および三翠同窓会事務局竹谷吉弘が担当しました。ご多忙中ご寄稿いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

最後に、同窓生の皆様のご健勝とご活躍を祈念いたしますとともに、引き続き生物資源学研究所・生物資源学部ならびに三翠同窓会へのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

長屋 祐一（生資2、平成5年卒）

令和 8 年 7 月 29 日

三 重 大 学 三翠同窓会発行

〒514-8507 津市栗真町屋町1577
(三重大学生物資源学部三翠会館内)

☎ 059-231-9677(代)

振替口座 00870-4-16556

E-mail: sansui-dosokai@bio.mie-u.ac.jp

個人情報 保護法に ついて

平成17年4月より個人情報の保護に関する法律が施行されました。三翠同窓会においても会員の皆様の個人情報を扱っております関係上、取扱には今まで以上に万全の注意が必要となります。

これを受け三翠同窓会学内役員会では、個人情報保護方針を次のように取扱方法を決めました。

三重大学三翠同窓会個人情報保護要領

本会は、会員の個人情報を適切に取扱う事を重要項目として個人情報保護に関する法律その他関連法令に従い、次のとおり会員の個人情報を細心の注意をもって保護管理をいたします。

①個人情報の収集について

本会は、適法かつ公正な手法で、会員の個人情報の収集を行う。また、収集した個人情報は正確かつ最新の内容に保つように努める。

②個人情報の利用目的

本会は、収集した個人情報を、会則に定める事項の遂行に必要と判断される諸事業（会員名簿の作成・本会及び三翠同窓会からの各種通信文書の送付等）にのみ利用し、それ以外に利用はいたしません。上記の業務遂行上、個人情報の取扱いを第三者に委託する場合があります。この場合は、本会は当該第三者において会員の個人情報を厳正に取扱うよう、役員会で協議し、適正な監督指導を行います。

③個人情報の第三者提供

本会は、会員の個人情報を本人同意なしに三重大学及び会員以外の第三者に提供又は開示はいたしません。ただし、会則に定める事項の遂行に必要と判断される場合は、役員会で審議の上、その業務遂行の委託先へ提供させて頂く場合は契約書を取交わし厳正に監督・指導します。

④保有する個人情報の安全管理

本会は、保有する個人情報を安全に管理するため、秘密保持には万全を尽くします。また、委託先においても適正な監督・厳正な管理を実施いたします。

⑤保有個人情報の開示・訂正・利用停止

本会は、保有している個人情報について、会員ご自身がその開示、追加、訂正、削除、利用停止等を求める権利を有していることを認識し、会員よりこれらの要求があった場合には、関連法令に従い速やかに対応いたします。その際、第三者による情報の操作等を防止するために、公的書類の写しの提出を求め、ご本人からの申し出かどうかを確認することとします。

⑥問い合わせ先

三翠同窓会会員名簿に関する問い合わせは次の窓口までご連絡下さい。

三重大学生物資源学部三翠同窓会事務局

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577番地

TEL/FAX: 059-231-9677

E-mail: sansui-dosokai@bio.mie-u.ac.jp